

---

# 針葉樹文庫解題

---

2009年5月16日



# はじめに

針葉樹文庫は、針葉樹会\*の物故会員2名の蔵書——ともに登山に学究心を抱き山岳図書蒐集に注力した、増山清太郎（1910～2000）と山本健一郎（1934～2007）の蔵書——を中核にし、それに他の針葉樹会員からの寄贈本を加えて集成したものです。

1930年代後半に、東京商科大学一橋山岳部の小谷部全助（1914～1945）たちは、北岳バットレス（第1尾根、第3尾根、第4尾根）の冬期初登攀を果たしました。これらの困難な岩壁登攀は、旧芦安村を拠点にし、同村の登山ガイドたちの協力を得ての快挙でした。

芦安村は昔から南アルプス登山の重要な根拠地であり、また山岳ガイドを輩出して登山家を助けていました。南アルプス芦安山岳館（以下、山岳館とします）は、同村を含む南アルプスの多様な自然やそこに生きた人々の文化や歴史を将来に伝える活動を続けていますが、その一環として、山岳ガイドと登山家の記録を残そうとしています。その中に欠かせないものとして、山岳界の耳目を集めた、北岳バットレスでの一橋山岳部の活躍がありました。

こうしたことから、山岳館は、北岳バットレス登攀の歴史資料をして奇貨居くべしとし、『針葉樹』など一橋山岳部の活動資料を含む山岳図書の文庫を、同部出身者の蔵書集合という形で設置するという、基本構想を提起されました。

その提起に応じて、針葉樹会は、会員蔵書を中核に山岳書を集成して「針葉樹文庫」とすることにしました。そして、(1) 増山と山本の蔵書を主体とする、(2) 一橋山岳部と針葉樹会が発行した資料を網羅する、(3) 会員が出版した山岳書を編入するという集成作業を行い、その結果としてこの文庫が生まれました。

針葉樹文庫がここ南アルプス芦安山岳館に置かれることになった背景には、以上のような縁や経緯があったのです。

ここで、蔵書を提供した2人について、簡単に紹介しておきます。

増山清太郎は、一橋山岳部の二つの時代（もっぱら逍遥登山に留まっていた草創期と、後に小谷部全助らが先駆的な登攀を目指すようになった時期）の過渡期に活躍しました。一橋山岳部は「登山はただ登るだけでなく、読み、書いて、はじめて完成する」という伝統を育んできましたが、増山はそれを実践して、「針葉樹会十年史稿」を執筆するかたわら、只見の未知の谷を踏査するなどしました。増山は、富士山文献調査など民俗学書誌にも造詣深い人でした。

---

\* 旧制東京商科大学一橋山岳部（1922年創部）およびその後身の一橋大学一橋山岳部の出身者から成る会です。針葉樹という名称は、草創期に秩父の深い谷を探索した活動に由来します。

山本健一郎は、戦後の一橋山岳部復興期を担ったひとりとして、新制下で体系的な登山活動を展開し、山岳研究にも主導的活動をしてきました。その先進的立場から針葉樹会が海外登山に進出する原動力ともなり、ヒンズークシュ遠征隊を隊長として率いました。さらに、山本は、長きにわたって地道に針葉樹会の運営に尽力する一方、日本山岳会の役員を務めるなど幅広い活躍をしました。

こうして一橋山岳部および針葉樹会が基軸になった文庫が今回初めて実現することになったのは、まことに有意義なことだと考えます。なぜなら、(1) その歴史を物語る資料が、初めて、意図して、ある程度整った形で揃えられた、(2) それが一般の閲覧に供する機会を与えられた、また(3) 針葉樹会の沿革の中で新旧ともいうべき時代をそれぞれ代表する博学の士であった二人の会員の蔵書を生かすことができた、さらには(4) 諸会員の著作物が一堂に揃うことにより、針葉樹会が世に及ぼす影響力といったものを示すことができたからです。

このように針葉樹会にとって意義ある文庫ですが、同時に外部の方々にとってもそうであってほしいと願っています。そういう意味で、この文庫が、貴重な資料として広く、長く利用されることを望んでやみません。

最後になりますが、寄付受納という形式で針葉樹文庫を実現してくださった南アルプス市に深甚なる謝意を表したいと思います。とりわけ、南アルプス芦安山岳館館長の塩沢久仙氏から賜りました多大なるご協力、ご支援に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

針葉樹会会長 竹中 彰

# 針葉樹文庫解題

## － もくじ －

はじめに（針葉樹会会長 竹中 彰）	3
もくじ	5
一橋山岳部の底流にあるもの	7

凡例	9
針葉樹文庫目録	10
分類Ⅰ：一橋山岳部と針葉樹会の公式資料	10
分類Ⅱ：一橋山岳部員と針葉樹会員の著書・訳書・編書・監修書	11
分類Ⅲ：海外での登山と探検に関する図書	13
分類Ⅳ：日本での登山に関する図書	18
分類Ⅴ：全集	21
人名索引	23

附録	31
注：附録の内容は、附録もくじ（p. 31）を参照。	

編集後記	51
------	----

# 一橋山岳部の底流にあるもの

## —針葉樹文庫の背景と特色—

### <北岳バットレスと一橋山岳部>

芦安の背後に聳える南アルプス連峰の中核は、何といても北岳である。その東面は、周囲に類を見ぬ、きわだった岩稜が幾筋か山体を支えるかのように頂上に向かってせり上がっているところから、バットレス（建築用語で胸壁）と名付けられ、まさにこの一帯の山々の象徴的存在となった。そして、これに挑んだ登山家のロマンこそ、この地方の花形物語として長く伝えられるべきものであった。

当初、北岳バットレスを開拓したのは京都大学や立教大学だが、本格的な冬季登攀に取り組んだのは東京商大であり、1935年12月に第3尾根（小谷部全助、鷹野雄一、小林重吉）、1937年1月に第1尾根および第4尾根（小谷部全助、森川眞三郎）をそれぞれ積雪期初登攀した。その頃、冬の岩壁登攀というそれ迄の技術レベルを凌駕する最高難度に挑戦していたのは、ほかに早稲田大学の穂高滝谷登攀など、いくつかに過ぎない。バットレス冬季登攀は、まさに「群雄を退けて断然王者の気概を示す画期的な偉業」（創立期の部員で重鎮の近藤恒雄の言）だったと言えよう。その記録は、『針葉樹』第9号に詳しい。

### <一橋山岳部の歴史が育んだ伝統>

小谷部全助たちの先鋭的登攀活動が一橋山岳部の最も華やかな時代を画したことは疑いないが、一橋山岳部と針葉樹会の歴史

を語る際、それだけが語り継がれるべきものだというわけではない（附録「一橋山岳部と針葉樹会の登山探検記録」を参照）。その歴史が育んだ伝統は、もっと深く、多様性に富んだものであり、そうであったからこそ少なからぬ独創的な登山家が輩出した。草創期の、おのがじし気の合う仲間が好きな山を歩くといった基本理念はやがて少数精鋭の先鋭登山に転化していったが、そうした山行に共鳴し協力する多くの仲間の存在はなお不可欠なのであった。緊張感を保ち全員一丸の集団とはなっても、そこには個性を重視しながら集うという自由集団の色彩が色濃く残っていた。そして、その色彩は創立から今に至るまで漂い続けている。

自由な気分の発揚が当たり前のように横溢する中で、伝統的に受け継がれているのは、内外を問わず未知未踏の領域に好奇心を抱き究明しようとする心とか、登攀技術向上などよりも、むしろ探検精神の発露といったものへ強く傾く行動とかであるように思われる。それが端的に表れているのが、針葉樹会創設初期からの何人かの会員による外国文献渉猟、世界山岳研究、そして翻訳や評論などによる紹介だろう。また、海外登山探検の実践においても、未踏山域の解明を中核に置く企画が重視されるのを常としてきた。

### <蔵書の性格及び関連する他文庫>

そういう背景を展望すると、増山や山本の

蔵書が持つある種の特色が浮かび上がるのではないか。それはつまり、針葉樹会そのものの活動資料以外には、広く山岳のあり様を理解するための資料、世界規模での登山の歴史や流れを知るための資料、そしてそれらを的確に認識するためにこれだけは読んでおかなければならないといった、正統的な山岳書が揃っていることだ。この素地があって、現在に至る針葉樹会の歴史が培われたと考えれば、このように構成された蔵書集を針葉樹文庫という名称で表すのも許容されよう。

針葉樹会には、すでに故人となった、優れた蔵書家が何人か存在する。それらの蔵書は、さまざまな形で個別の文庫としてまとめられ、残されている（末尾の主要文庫一覧を参照）。しかし、針葉樹会を代表するような蔵書集合を揃えた文庫は、存在しない。それは、蔵書というものの本質（蔵書は個人特有の読書傾向や蒐集目的に沿って集められるのが一般的である）を反映していた。したがって、ここで強調しておきたいのは、この文庫の立場とは、針葉樹会を代表する山岳書を揃えることを当初から目的としたわけではないが、上述の事情を背景として針葉樹文庫という名称を冠して生まれたということである。

最後に、針葉樹会の蔵書家物故会員の残した蔵書を所収した、他に現存する文庫（一部は未整理保管中）を列記し、参考に供したい。

**吉沢一郎**（1903～1998）文庫：  
（洋書）立山山岳博物館資料室、  
富山県芦峯寺  
（和書）アメリカ山岳会書庫、  
コロラド州デンバー

**磯野計蔵**（1907～1966）文庫：  
日本山岳会ルーム、  
東京都千代田区麹町

**望月達夫**（1914～2002）文庫：  
日本山岳会ルーム、  
東京都千代田区麹町

**山田亮三**（1920～1988）文庫：  
大町エコノミスト村クラブハウス、  
長野県信濃大町

**中島 寛**（1938～1998）文庫：  
大町山岳博物館資料室、  
長野県信濃大町

# 針葉樹文庫目録

## 凡例

### 1. 図書の配列

針葉樹文庫目録は、文庫の特徴をいやすため、次のように分類別の配列とした。

#### 分類Ⅰ：

一橋山岳部と針葉樹会が発行した公式資料（部報・会報・遭難報告書・追悼録など）を集約した。

注：目録に「一橋山岳会」という発行所がある。  
これは針葉樹会が一橋山岳部と合同して活動を行うときの構成体を指す。

#### 分類Ⅱ：

一橋山岳部員と針葉樹会員（それぞれの関係者を含む）による著書・訳書・編書・監修書を集約した。分類Ⅲに属する図書でありながら、便宜上、分類ⅢまたはⅤに含めたものがある（分類の番号で、3-224、3-225、5-28、5-30）。

#### 分類Ⅲ：

海外での登山と探検に関する図書を集約し、洋書、翻訳書、和書と小分類を設けた。なお、全集については、分類Ⅴとした。

#### 分類Ⅳ：

日本での登山に関する和書を集約した。

#### 分類Ⅴ：

分類Ⅲに属する全集を集約した。ただし、『東洋文庫』は全巻揃いではない。

### 2. 目録のフォーマット

#### 棚番号

図書が納められている本棚の番号を示す。番号は、本棚に向かって右の最上段がS-1、その下がS-2、左の最下段がS-18となっている。

#### 番号

X - Yの形式で、Xは分類を示す（Ⅰは分類Ⅰなど）。Yは、分類ごとの2桁または3桁の通し番号を示す。分類Ⅲの場合は、洋書001～026、翻訳書101～160、和書201～255と小分類の通し番号とした。

#### 書名

#### 著者

#### 訳者

#### 発行所

おおむね図書に印刷されている実際の表記に従った：

- ・旧字体の漢字も、できるかぎり使用した。
  - ・洋書の著者名も、例えば、Weston, Walter.ではなく、Walter Westonと表記した。
- 翻訳書の著者名は、判明するかぎり、英語（アルファベット）表記とした。洋書の著者名と同じく、Walter Westonと表記した。

#### 発行年月日

和暦表記とした。

# 針葉樹文庫目録

## 分類 I : 一橋山岳部と針葉樹会の公式資料 (部報・会報・遭難報告書・追悼録など) (1/1)

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-4	1-01	針葉樹 第01号				大正14年
S-4	1-02	針葉樹 第02号	吉沢一郎・編		東京商科大学内一橋山岳部	大正15年12月16日
S-4	1-03	針葉樹 第03号	吉沢一郎・編		東京商科大学内一橋山岳部	昭和2年12月28日
S-4	1-04	針葉樹 第04号	中島嘉一郎・手塚晴雄・金田一郎・編		東京商科大学内一橋山岳部	昭和4年3月1日
S-4	1-05	針葉樹 第05号	中島嘉一郎・芋川隼一・高瀬進三・太田又一・編		東京商科大学内一橋山岳部	昭和5年7月1日
S-4	1-06	針葉樹 第06号	増山清太郎・太田又一・清水達雄・編		東京商科大学内一橋山岳部	昭和7年8月1日
S-4	1-07	針葉樹 第07号	堀岡清・林俊介・望月達夫・編		東京商科大学内一橋山岳部	昭和9年10月10日
S-4	1-08	針葉樹 第08号	林俊介・柿原謙一・望月達夫・小谷部全助・小林重吉・岩崎利一・編		東京商科大学内一橋山岳部	昭和10年11月25日
S-4	1-09	針葉樹 第09号	小谷部全助・望月達夫・森川眞三郎・佐々木誠・編		東京商科大学内一橋山岳部	昭和12年7月25日
S-4	1-10	針葉樹 第10号	岩崎利一・船本文治・大塚武・日江井正巳・山田亮三・編		東京商科大学内一橋山岳部	昭和14年9月15日
S-4	1-11	針葉樹 第11号	吉田義則・佐藤恭・甘利仁朗・上原利夫・茂木明俊・編		一橋大学内一橋山岳部	昭和30年12月31日
S-3	1-12	針葉樹 第12号	峰高教通・大賀二郎・山本尚禎・倉知敬・編		一橋大学内一橋山岳部	昭和35年7月25日
S-3	1-13	針葉樹 第13号	倉知敬・大建二郎・三森茂充・高崎俊平・編		一橋大学内一橋山岳部	昭和39年11月10日
S-3	1-14	針葉樹 第14号	佐藤久尚・金子晴彦・米田篤裕・宮下克彦・編		一橋大学内一橋山岳部	昭和60年6月27日
S-3	1-15	針葉樹 復刻版 (第1号～第13号)	佐藤久尚・編		針葉樹会	昭和60年7月25日
S-4	1-16	一橋山岳部 (部) 報 第2号～第6号、別号	東京商科大学一橋山岳部・編		東京商科大学内一橋山岳部	昭和5年～6年
S-4	1-17	針葉樹会報 第1号～第99号	針葉樹会・編		針葉樹会	昭和5年～17年
S-4	1-18	針葉樹会報 復刊 第01号～第31号 合本	針葉樹会・編		針葉樹会	昭和27年～46年
S-4	1-19	針葉樹会報 復刊 第32号～第57号 合本	針葉樹会・編		針葉樹会	昭和47年～55年
S-4	1-20	針葉樹会報 復刊 第58号～第80号 合本	針葉樹会・編		針葉樹会	昭和56年～平成6年
S-4	1-21	針葉樹会報 復刊 第81号～第100号 合本	針葉樹会・編		針葉樹会	平成7年～16年
S-4	1-22	針葉樹会報 復刊 第101号～第113号	針葉樹会・編		針葉樹会	平成16年～20年
S-3	1-23	落葉	堀岡清・編		一橋山岳部	昭和10年2月15日
S-3	1-24	友田純一君追悼録	山田亮三・編		一橋山岳部	昭和16年7月18日
S-3	1-25	奥秩父 前田・古澤・長沼三君追悼録			東京商科大学一橋山岳部	昭和18年10月18日
S-3	1-26	谷川岳 故山中健雄君追悼録			一橋山岳部	昭和24年11月5日
S-3	1-27	赤石沢 追悼 橋本明君	金子晴彦・編		一橋大学一橋山岳部	昭和46年6月
S-4	1-28	一橋大学山岳部インドヒマラヤ登山隊1981遭難報告			一橋山岳会	昭和56年10月31日
S-3	1-29	一橋大学一橋山岳部インドヒマラヤホワイトセール峰遠征隊追悼文集 (背表紙は「追悼」)			一橋山岳会	昭和58年10月15日
S-4	1-30	白きヒマラヤの巨帆 - 1981年ホワイト・セール遭難報告書 -			一橋山岳会	昭和58年11月20日
S-3	1-31	追悼 細野伸二君 - 剣岳遭難報告・追悼			一橋大学一橋山岳部	平成2年2月1日

## 分類Ⅱ：一橋山岳部員と針葉樹会員の著書・訳書・編書・監修書（1/2）

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-12	2-01	マウンテン・ワールド 第01巻 1946	スイス山岳研究財団・編	近藤 等	小学館	平成1年6月10日
S-12	2-02	マウンテン・ワールド 第02巻 1947	スイス山岳研究財団・編	宮下啓三	小学館	平成1年6月10日
S-12	2-03	マウンテン・ワールド 第03巻 1948	スイス山岳研究財団・編	前野光弘	小学館	平成1年6月10日
S-12	2-04	マウンテン・ワールド 第04巻 1949	スイス山岳研究財団・編	横川文雄	小学館	平成1年6月10日
S-12	2-05	マウンテン・ワールド 第05巻 1950	スイス山岳研究財団・編	福田宏年・杉山雅夫	小学館	平成1年6月10日
S-12	2-06	マウンテン・ワールド 第06巻 1951	スイス山岳研究財団・編	宮下啓三	小学館	平成1年6月10日
S-12	2-07	マウンテン・ワールド 第07巻 1952	スイス山岳研究財団・編	福田宏年・山野井裕義	小学館	平成1年6月10日
S-6	2-08	マウンテン・ワールド 第08巻 1953	スイス山岳研究財団・編	薬師義美	小学館	昭和62年3月1日
S-6	2-09	マウンテン・ワールド 第09巻 1954	スイス山岳研究財団・編	望月達夫	小学館	昭和62年3月1日
S-6	2-10	マウンテン・ワールド 第10巻 1955	スイス山岳研究財団・編	田村協子	小学館	昭和62年3月1日
S-6	2-11	マウンテン・ワールド 第11巻 1956/57	スイス山岳研究財団・編	佐藤テル	小学館	昭和62年3月1日
S-6	2-12	マウンテン・ワールド 第12巻 1958/59	スイス山岳研究財団・編	山本健一郎・倉知 敬	小学館	昭和62年3月1日
S-6	2-13	マウンテン・ワールド 第13巻 1960/61	スイス山岳研究財団・編	新島義昭	小学館	昭和62年3月1日
S-6	2-14	マウンテン・ワールド 第14巻 1962/63	スイス山岳研究財団・編	吉永定雄	小学館	昭和62年3月1日
S-6	2-15	マウンテン・ワールド 第15巻 1964/65	スイス山岳研究財団・編	桑原正人・薬師義美	小学館	昭和63年1月1日
S-6	2-16	マウンテン・ワールド 第16巻 1966/67	スイス山岳研究財団・編	雁部貞夫	小学館	昭和63年3月1日
S-6	2-17	マウンテン・ワールド 第17巻 1968/69	スイス山岳研究財団・編	吉澤一郎	小学館	昭和63年3月1日
S-6	2-18	マウンテン・ワールド 第18巻 ヒマラヤ編年誌1	スイス山岳研究財団・編	水野 勉	小学館	昭和63年1月1日
S-6	2-19	マウンテン・ワールド 第19巻 ヒマラヤ編年誌2	スイス山岳研究財団・編	水野 勉	小学館	昭和63年1月1日
S-6	2-20	Japanese Alpine News Vol. 1	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成13年10月
S-6	2-21	Japanese Alpine News Vol. 2	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成14年4月
S-6	2-22	Japanese Alpine News Vol. 3	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成15年5月
S-6	2-23	Japanese Alpine News Vol. 4	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成15年5月
S-6	2-24	Japanese Alpine News Vol. 5	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成16年5月
S-6	2-25	Japanese Alpine News Vol. 6	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成17年5月
S-6	2-26	Japanese Alpine News Vol. 7	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成18年5月
S-6	2-27	Japanese Alpine News Vol. 8	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成19年5月
S-6	2-28	Japanese Alpine News Vol. 9	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成20年5月
S-6	2-29	Supplement to Japanese Alpine News Vol. 5	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成16年5月
S-6	2-30	Supplementary Papers to Japanese Alpine News Vol. 2	Tamotsu Nakamura (中村保)		Japanese Alpine Club	平成14年4月
S-2	2-31	ヒマラヤの東	中村 保		山と溪谷社	平成8年3月15日
S-2	2-32	深い浸食の国	中村 保		山と溪谷社	平成12年11月10日
S-2	2-33	チベットのアルプス	中村 保		山と溪谷社	平成17年3月1日
S-4	2-34	一九三八年度米國隊のK2遠征報告	吉澤一郎		日本山岳会	昭和14年
S-8	2-35	アルプス登攀記（上）	Edward Whymper	浦松佐美太郎	岩波書店	昭和57年6月22日
S-8	2-36	アルプス登攀記（下）	Edward Whymper	浦松佐美太郎	岩波書店	昭和57年6月22日
S-3	2-37	一期一会の山、人、本	中島 寛		中島昭子	平成11年4月23日
S-4	2-38	ウィンパー伝 - 栄光と悲劇の人 -	Frank Sydney Smythe	吉沢一郎	あかね書房	昭和41年8月31日
S-11	2-39	エヴェレスト その人間的記録	Wilfrid Noyce	浦松佐美太郎	文藝春秋	昭和31年1月31日
S-2	2-40	エリック・シブトン	Peter Steele	倉知 敬	山と溪谷社	平成12年7月25日
S-3	2-41	太田可夫詩集	太田可夫	石川善次郎・編	私家版	昭和42年11月2日
S-3	2-42	折々の山	望月達夫		茗溪堂	昭和55年7月
S-4	2-43	カラコルムの夜明け	William Martin Conway	吉沢一郎	あかね書房	昭和42年11月30日
S-2	2-44	北の山・南の山 研究・随筆・紀行	吉澤一郎		三省堂	昭和17年11月20日

## 分類Ⅱ：一橋山岳部員と針葉樹会員の著書・訳書・編書・監修書（2/2）

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-3	2-45	菰野菊 故中島嘉一郎君追悼録	金田一郎・編		不明	昭和11年11月15日
S-15	2-46	コンサイス外国山名辞典	吉沢一郎・監修		三省堂	昭和59年8月25日
S-3	2-47	静かなる山	川崎精雄・望月達夫・横山厚夫・他2名		茗溪堂	昭和53年7月
S-3	2-48	静かなる山 続	川崎精雄・望月達夫・横山厚夫・他2名		茗溪堂	昭和55年11月
S-12	2-49	世界の名峰	岳人編集部・編		中日新聞東京本社	昭和47年7月1日
S-8	2-50	たった一人の山	浦松佐美太郎		文藝春秋社	昭和16年6月30日
S-3	2-51	蕨・深呼吸	鈴木羊三	石上茂・監修	私家版	
S-4	2-52	テリリチ・ミール登頂	ノルウエー隊 (Arne naess)	吉沢一郎	あかね書房	昭和42年11月30日
S-3	2-53	遠い山 近い山	望月達夫		茗溪堂	昭和43年3月
S-2	2-54	登高記	吉澤一郎		古今書院	昭和5年3月5日
S-3	2-55	ヒマラヤーその探検と登山の歴史ー	Kenneth Mason	田辺主計・望月達夫	白水社	昭和32年7月5日
S-4	2-56	ヒマラヤ探検史の一齣	望月達夫		日本山岳会	昭和14年
S-18	2-57	氷雪に挑む 山とスキー寫真集	朝日新聞社・編		朝日新聞社	昭和15年1月15日
S-9	2-58	ヒラリー自伝	Sir Edmund Hillary	吉沢一郎	草思社	昭和53年3月1日
S-2	2-59	冒険の達人	Jim Curran	倉知 敬	茗溪堂	平成15年11月14日
S-2	2-60	未踏の山河	Eric Shipton	大賀二郎・倉知敬	茗溪堂	昭和47年2月10日
S-4	2-61	ミニヤ・ゴンカ山群 (支那西康省)	望月達夫		日本山岳会	昭和15年
S-2	2-62	ミニヤコンカ初登頂	R. Burdsall 他3名	山本健一郎	ナカニシヤ出版	平成10年3月1日
S-4	2-63	望月達夫著作目録	水野 勉・編		水野 勉	平成15年1月31日
S-3	2-64	蘆山辿歴	望月達夫・岡田昭夫		茗溪堂	昭和63年7月
S-4	2-65	山田亮三山行譜			私家版	平成2年1月
S-3	2-66	山と人と	久保孝一郎	松下順吉 / 奥村一郎・編	不明	平成7年2月22日
S-2	2-67	山へ わが登高記	吉沢一郎		文藝春秋	昭和55年8月25日
S-2	2-68	ロシユ・ゴル氷河の山旅	山本健一郎・編		あかね書房	昭和43年7月10日
S-3	2-69	わが山の生涯	Tom Longstaff	望月達夫	白水社	昭和32年1月20日
S-3	2-70	忘れえぬ人びと	望月達夫		茗溪堂	昭和61年8月

注1: 番号 2-47と 2-48 の著者の「他2名」は、山田哲郎、中西章。

注2: 番号 2-62 の著者の「他3名」は、A. Emmons、T. Moore、J. T. Young。

## 分類Ⅲ：海外での登山と探検に関する図書（1/5）

## 小分類・洋書

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-5	3-001	A Progress in Mountaineering	J. H. B. Bell		Oliver and Boyd	昭和25年
S-5	3-002	A Walk in the Sky	Nicholas B. Clinch		The Mountaineers and the American Alpine Club	昭和57年
S-5	3-003	Annapuruna II	Richard Grant		William Kimber	昭和36年
S-11	3-004	Climbs of My Youth	Andre Roch		Lindsay Drummond London	昭和24年
S-11	3-005	I Chose To Climb	Chris Bonington		The Anchor Press Ltd	昭和53年
S-10	3-006	Japanischem Bergsteigergeist Auf Der Spur	Suke Okazawa (岡沢祐吉)		自費出版?	平成3年
S-11	3-007	Meine Bergfahrten	A. F. Mummery		Bergverlag Rudolf Rother	昭和5年
S-11	3-008	Men Against The Clouds	Richard L.Burdsall, Arthur B. Emmons		Harper & Brothers Publishers	昭和10年
S-11	3-009	Men Against The Clouds	Richard L.Burdsall, Arthur B. Emmons		The Mountaineers	不明
S-5	3-010	Mount Everest	Toni Hagen 他3名	E. N. Bowman	Oxford University Press	昭和38年
S-12	3-011	Nepal	Toni Hagen		Kummerly & Frey	昭和36年
S-5	3-012	Ney Elias	Gerald Morgan		George Allen & Unwin	昭和46年
S-5	3-013	Red Peak	Malcolm Slessor		Hodder and Stoughton	不明
S-5	3-014	The Alpine Journal 1969	Alan Blackshaw 編		The Alpine Club	昭和44年
S-5	3-015	The Mountain World 1952	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和28年
S-5	3-016	The Mountain World 1954	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和29年
S-5	3-017	The Mountain World 1955	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和30年
S-5	3-018	The Mountain World 1956/57	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和32年
S-5	3-019	The Mountain World 1958/59	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和33年
S-5	3-020	The Mountain World 1960/61	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和36年
S-5	3-021	The Mountain World 1962/63	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和39年
S-5	3-022	The Mountain World 1964/65	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和41年
S-5	3-023	The Mountain World 1966/67	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和43年
S-5	3-024	The Mountain World 1968/69	The Swiss Foundation for Alpine Research		George Allen & Unwin	昭和45年
S-5	3-025	The Ultimate Challenge	Chris Bonington		Stein and Day	昭和48年
S-5	3-026	Where Four Worlds Meet	Fosco Maraini		Hamish Hamilton	昭和39年

注：番号 3-010 の著者の「他3名」は、G. O. Dyrenfurth、Ch. v. f. Haimendorf、E. Schneider。

## 分類Ⅲ：海外での登山と探検に関する図書（2/5）

### 小分類・翻訳書

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-9	3-101	アルプス及コーカサス登攀記	A. F. Mummery	石 一郎	朋文堂	昭和13年12月20日
S-9	3-102	K2-非情の山-	C. S. Houston & R. H. Bates	伊藤洋平	白水社	昭和31年7月15日
S-14	3-103	アフリカ探検記	リビングストーン	菅原清治	河出書房	昭和29年5月10日
S-11	3-104	或る登攀家の生涯	カール・メルクル	長井一男・松本重男	昭和刊行會	昭和18年11月20日
S-11	3-105	アルプスの三つの壁	A. Heckmair	長越茂雄	朋文堂	昭和30年7月1日
S-10	3-106	Called By This Mountain	Robert William Sandford	芳賀孝郎・監修	ACC & JAC	不明
S-10	3-107	ウォルター・ウェストン未刊行著作集 上巻	Walter Weston	三井嘉雄	郷土出版社	平成11年11月27日
S-10	3-108	ウォルター・ウェストン未刊行著作集 下巻	Walter Weston	三井嘉雄	郷土出版社	平成11年11月27日
S-18	3-109	生きた、還った 8000m 峰 14 座完登	ラインホルト・メスナー	横川文雄	東京新聞出版局	昭和62年8月12日
S-9	3-110	ウスリー紀行	ヴェ・カ・アルセーニエフ	長谷川四郎	河出書房	昭和39年9月10日
S-9	3-111	雲表に聳ゆる峯峯	Albert Eggler	横川文雄	朋文堂	昭和33年6月20日
S-9	3-112	エヴェレスト征服	Yves Malartie	近藤 等	新潮社	昭和29年7月8日
S-11	3-113	エヴェレスト登頂	Brigadier Sir John Hunt	朝日新聞社	朝日新聞社	昭和29年4月30日
S-9	3-114	エヴェレスト登山記	Sir Francis Younghusband	田邊主計	第一書房	昭和5年8月15日
S-18	3-115	エヴェレストの東	Sir Edmund Hillary and George Lowe	藤木九三	ベースボール・マガジン社	昭和46年11月10日
S-15	3-116	オクサスとインダスの間に	R. C. F. Schomberg	広島三朗	論創社	昭和60年12月15日
S-10	3-117	ガッシャブルム4	Fosco Maraini	牧野文子	理論社	昭和37年12月
S-9	3-118	神々の座-印度・西藏紀行-	Herbert Tichy	村上啓夫	鎌倉書房	昭和19年4月10日
S-9	3-119	カンチェンジュンガ その成功の記録	Charles Evans	島田 巽	朝日新聞社	昭和32年11月5日
S-15	3-120	極地に逝ける人々	ド・ラ・クロワ	奥又四郎	新潮社	昭和32年12月25日
S-11	3-121	極東の遊歩場	Walter Weston	岡村精一	山と溪谷社	昭和59年5月1日
S-18	3-122	グリンデルヴァルトの山案内人	Samuel Brawand	井手貢夫	茗溪堂	昭和52年1月1日
S-9	3-123	最後の青い山	Ralph Barker	安東小千世	二玄社	昭和36年6月5日
S-9	3-124	死のクレバス	Joe Simpson	中村輝子	岩波書店	平成3年8月26日
S-11	3-125	ジョージ・マロリー	David Robertson	夏川道子	山洋社	昭和60年3月16日
S-9	3-126	処女峰アンナブルナ	Maurice Herzog	近藤 等	白水社	昭和28年7月5日
S-9	3-127	青春の氷河	Rogh Frison-Roche	近藤 等	三笠書房	昭和31年6月30日
S-14	3-128	世界最悪の旅	Apsley Cherry-Garrard	加納一郎	河出書房	昭和28年11月15日
S-11	3-129	そして謎は残った	J. Hemmleb, L. A. Johnson, E. R. Simonson	海津正彦・高津幸枝	文藝春秋	平成11年12月10日
S-9	3-130	大岩壁の五十年	Riccardo Cassin	水野 勉	白水社	昭和58年6月10日
S-11	3-131	大岩壁のプロフェッショナル	Rene Desmaison	近藤 等	集英社	昭和57年10月25日
S-11	3-132	ダウラギリ登頂	Max Eiselin	横川文雄	ベースボール・マガジン社	昭和38年6月5日
S-9	3-133	チベットの七年	H. Harrer	近藤 等	新潮社	昭和30年7月20日
S-15	3-134	チベット旅行記	河口慧海	長沢和俊・編	白水社	昭和55年7月15日
S-9	3-135	登山靴とスキー	Henry Heek	横川文雄	朋文堂	昭和35年3月30日
S-11	3-136	ドリユの西壁	Guido Magnone	山口耀久	朋文堂	昭和34年7月10日
S-11	3-137	ナンガ・パルパット	Karl M. Herrlichkoffer	横川文雄	朋文堂	昭和29年10月18日
S-17	3-138	日本山岳紀行	Wilhelm Steinitzer	安藤 勉	信濃毎日新聞社	平成4年1月20日
S-11	3-139	ネパール・ヒマラヤ	H. W. Tilman	深田久弥	四季書館	昭和39年9月10日
S-9	3-140	ネパールの高地にて	Norman Hardie	神原達・牧野昇	朋文堂	昭和35年6月20日
S-9	3-141	白嶺-コルデイェラ・ブランカー	Georges Kogan & Nicole Leininger	近藤 等	講談社	昭和33年5月30日
S-9	3-142	八千米の上と下	Hermann Buhl	横川文雄	朋文堂	昭和30年10月1日
S-9	3-143	ヒドンピーク初登頂	Nicholas B. Clinch	薬師義美・吉永定雄	ナカニシヤ出版	平成10年4月30日
S-10	3-144	ヒマラヤ紀行	J. D. Hooker	薬師義美	白水社	昭和54年8月10日

## 分類Ⅲ：海外での登山と探検に関する図書（3/5）

### 小分類・翻訳書

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-11	3-145	ヒマラヤ自転車旅行記	ベッティナ・セルビー	柴田京子	東京書籍	平成3年11月5日
S-11	3-146	ヒマラヤの真珠	Fosco Maraini	牧野文子	理論社	昭和31年5月
S-9	3-147	氷壁の履歴書	Walter Cecchinell	鈴木 勝	山と溪谷社	昭和52年9月20日
S-11	3-148	星と嵐－六つの北壁登行－	Gaston Rebuffat	近藤 等	白水社	昭和33年6月5日
S-11	3-149	マカルー－全員登頂－	Jean Franco	近藤 等	白水社	昭和31年10月20日
S-9	3-150	マチャプチャリ	Wilfrid Noyce	深田久弥	文藝春秋	昭和37年6月10日
S-10	3-151	万年雪の王国	Gaston Rebuffat	近藤 等	平凡社	昭和32年8月30日
S-11	3-152	モン・ブランからヒマラヤへ	Gaston Rebuffat	近藤 等	白水社	昭和31年6月5日
S-9	3-153	山	Hans Morgenthaler	荒井道太郎	朋文堂	昭和16年7月20日
S-9	3-154	山と風と太陽と泉	Andre Cahmson	堀口大樹	第一書房	昭和11年11月20日
S-10	3-155	山に闘う	Raymond Lambert	安川茂雄	三笠書房	昭和31年8月25日
S-11	3-156	山の危険	Zsigmoudy & Paulcke	松井 博	朋文堂	昭和17年9月1日
S-9	3-157	山の魂	F. S. Smythe	石 一郎	朋文堂	昭和32年6月1日
S-9	3-158	わが回想のアルプス	Guide Rey	安川茂雄	三笠書房	昭和33年6月10日
S-9	3-159	若き日の山行	L. Lachenal & G. Herzog	近藤 等	白水社	昭和32年5月10日
S-10	3-160	わが山々へ	Walter Bonatti	近藤 等	白水社	昭和41年7月15日

## 分類Ⅲ：海外での登山と探検に関する図書（4/5）

### 小分類・和書

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-12	3-201	1997 貢嘎山	佐々木孝雄・編集委員長		札幌山岳会	平成9年12月25日
S-12	3-202	四姑娘山群	桑原・浜田・永井・上岡・武田・吉村		広島山の会	平成6年1月20日
S-17	3-203	63歳のエヴェレスト	渡邊玉枝		白水社	平成15年7月25日
S-17	3-204	K12峰遠征記	岩坪五郎・編		中央公論社	昭和52年2月25日
S-17	3-205	アピ 悲劇と幸運の山	江上 康		創元社	昭和36年6月15日
S-1	3-206	アルプス記	松方三郎		龍星閣	昭和12年6月1日
S-1	3-207	アルプスと人	松方三郎		岡 書院	昭和23年12月10日
S-17	3-208	アルプスに光みなぎる時	近藤 等		東京新聞出版局	昭和54年8月31日
S-17	3-209	アルプスの名峰	近藤 等		山と溪谷社	昭和59年4月20日
S-17	3-210	インドラサン登頂	京都大学山岳部		河出書房	昭和39年2月25日
S-17	3-211	栄光への挑戦	菊地俊朗		二見書房	昭和40年2月12日
S-12	3-212	エヴェレストへの闘い	朝日新聞社・編		朝日新聞社	昭和28年12月30日
S-17	3-213	エベレストのぼらせませす	大蔵喜福		小学館	平成12年5月11日
S-12	3-214	横断山脈ミニヤ・コンカ峰	山森欣一		日本ヒマラヤ協会	平成8年4月14日
S-15	3-215	カラー・世界の山々	山と溪谷社		山と溪谷社	昭和42年10月1日
S-12	3-216	カラコルム・ヒンズークシュ登山地図	宮森常雄		ナカニシヤ出版	平成13年5月15日
S-12	3-217	カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究	宮森常雄・雁部貞夫		ナカニシヤ出版	平成13年5月15日
S-17	3-218	北千島冒険紀行	阿部幹雄		山と溪谷社	平成4年10月1日
S-17	3-219	禁断のアフガニスタン・パミール紀行	平井 剛		ナカニシヤ出版	平成15年12月15日
S-12	3-220	桑頂坑沙峰登山隊 1992	松永敏郎		アポロススポーツ・連絡事務所	平成6年3月15日
S-18	3-221	金剛山	稲川正一		日本旅行協会朝鮮支部	昭和14年4月20日
S-18	3-222	サルトロ・カンリ	京都大学学士山岳会		朝日新聞社	昭和39年1月10日
S-2	3-223	シルクロードの旅	深田久弥		朝日新聞社	昭和46年6月25日
S-6	3-224	世界山岳地図集成	越後宏治・編	吉沢一郎・監修	学習研究社	昭和53年12月10日
S-6	3-225	世界山岳地図集成	越後宏治・編	吉沢一郎・監修	学習研究社	昭和52年12月20日
S-12	3-226	世界山岳百科事典	岩間正夫・編		山と溪谷社	昭和46年7月1日
S-12	3-227	世界百名山	深田久弥		新潮社	昭和49年11月30日
S-15	3-228	第二回チベット旅行記	河口慧海		金の星社	昭和41年4月15日
S-12	3-229	ダウラギリ峰 洋梨ルート登山報告書	松原尚之		日本山岳会青年部ダウラギリI峰登山隊 1997	平成11年5月31日
S-18	3-230	チョゴリザ	京都大学学士山岳会・編著		朝日新聞社	昭和34年10月25日
S-17	3-231	チョゴリザ登頂	桑原武夫		文藝春秋	昭和35年3月10日
S-17	3-232	チロル案内	津田正夫		暮らしの手帖社	昭和45年11月1日
S-12	3-233	天壇の山に挑む ミニヤ・コンカ東面	山森欣一		日本ヒマラヤ協会	平成4年5月
S-17	3-234	登頂ヒマルチュリ	山田二郎		毎日新聞社	昭和36年2月25日
S-15	3-235	西藏（西藏遊記、西藏文化の新研究）	青木文教		芙蓉書房	昭和44年12月15日
S-18	3-236	ノシャック登頂	京都大学学士山岳会・編著		朝日新聞社	昭和36年6月10日
S-17	3-237	初登頂	平井一正		ナカニシヤ出版	平成8年3月15日
S-18	3-238	バルトロ・カンリ 1963	東京大学カラコルム遠征隊・編著		日本放送出版協会	昭和39年11月25日
S-17	3-239	東チベット横断紀行	朝日教之		山と溪谷社	昭和63年10月1日
S-18	3-240	ヒマラヤ	近藤 等		朋文堂	昭和28年4月1日
S-17	3-241	ヒマラヤ・サイバル登頂	平林克敏		サンケイ新聞出版局	昭和39年9月10日
S-10	3-242	ヒマラヤ閑話	水野 勉		水野 勉	平成10年9月9日

注：番号 3-202 の著者は、列幅の制約から姓のみを表記した。実際には、桑原良敏、浜田平太郎、永井剛、上岡祐二、武田和美、吉村千春。

## 分類Ⅲ：海外での登山と探検に関する図書（5/5）

### 小分類・和書

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-10	3-243	ヒマラヤ山河誌	諏訪田栄蔵		ナカニシヤ出版	平成6年4月5日
S-12	3-244	ヒマラヤ百高峰	藤田弘基		平凡社	平成18年4月20日
S-10	3-245	ヒマラヤ文献逍遙	水野 勉		鹿鳴荘	昭和61年3月
S-17	3-246	ヒマラヤへの道	今西錦司・編		中央公論社	昭和63年5月20日
S-12	3-247	ヒマラヤ名峰事典	薬師義美・雁部貞夫・編		平凡社	平成8年11月13日
S-12	3-248	ヒマラヤー山と人ー	深田久弥		中央公論社	昭和31年7月20日
S-17	3-249	ヒマルチュリ	村木潤次郎		毎日新聞社	昭和34年12月15日
S-12	3-250	ブータンの未踏峰へ	蛭田弥希		日本山岳会学生部ブータンヒマラヤ登山隊 1998	平成12年2月21日
S-18	3-251	マナスル 1952-3 年	日本山岳会・編		毎日新聞社	昭和29年3月10日
S-18	3-252	マナスル 1954-6 年	日本山岳会・編		毎日新聞社	昭和29年3月10日
S-17	3-253	マナスル登頂記	横 有恒・編		毎日新聞社	昭和31年9月12日
S-14	3-254	蒙古高原横断記	東亜考古學會蒙古調査班		日光書院	昭和16年9月25日
S-12	3-255	絲綢之路の高峰に立つ	日本木斯塔格阿塔山群登山隊 1995・編		日本山岳会 青年部	平成8年9月24日

## 分類Ⅳ：日本での登山に関する図書 (1/3)

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-8	4-001	『山の素描』の執筆者たち	高澤光雄		高澤光雄	平成17年4月1日
S-1	4-002	一日二日 山の旅	河田 楨		自強館書店	昭和2年5月15日
S-18	4-003	etude of Alps 風見武秀山岳寫真集	風見武秀		朋文堂	昭和28年9月15日
S-16	4-004	アールベルグ・スキー術	高橋次郎		博文館	昭和5年3月1日
S-7	4-005	会津の山々・尾瀬	川崎隆章・編		木耳社	昭和55年1月15日
S-8	4-006	青空と輝く残雪の山々	山田哲郎・横山厚夫		茗溪堂	昭和62年3月
S-1	4-007	赤石登山案内	信濃教育會下伊那部會・編		古今書院	大正12年7月25日
S-16	4-008	あの山この山	土居道彦		磯部甲陽堂	大正9年6月25日
S-8	4-009	ある日の山 ある日の峠	横山厚夫		白山書房	平成10年3月1日
S-8	4-010	幾つかの山	横山厚夫		朝日新聞社	昭和55年6月30日
S-7	4-011	異人たちの日本アルプス	庄田元男		日本山書の会	平成2年5月5日
S-8	4-012	いろりばた 続	南会津山の会		茗溪堂	平成16年3月30日
S-10	4-013	岩登	船田三郎		目黒書店	昭和5年6月25日
S-10	4-014	雲表を行く	冠 松次郎		墨水書房	昭和18年3月20日
S-7	4-015	奥秩父(全二巻)	原 全教		木耳社	昭和56年2月15日
S-1	4-016	回想の山山	桑原武夫		七丈書院	昭和19年4月30日
S-16	4-017	解題 日本名山図会	佐藤武雄		山と溪谷社	平成2年5月20日
S-14	4-018	海南小記/山の人生/北の人/東奥異聞/猪・鹿・狸	柳田國男/金田一京助/ 佐々木喜善/早川孝太郎		平凡社	昭和40年8月5日
S-8	4-019	上高地 登山と研究	熊澤正夫		刀江書院	昭和5年6月10日
S-1	4-020	岩壁登高	小林隆康		博山書店	昭和17年1月20日
S-8	4-021	黄色いテント	田淵行男		実業之日本社	昭和61年1月30日
S-2	4-022	きたぐに	深田久弥		東京美術	昭和45年8月25日
S-8	4-023	北八ヶ岳の黒い森から	千坂正郎		東京新聞出版局	昭和63年4月11日
S-16	4-024	キャンプ	茂木慎雄		アルス	昭和3年7月15日
S-1	4-025	霧の山稜	加藤泰三		朋文堂	昭和16年9月10日
S-1	4-026	霧の山	安川茂雄		朋文堂	昭和32年12月10日
S-16	4-027	銀嶺に輝く 報告と追悼	楯山正雄		東京帝國大學運動會 スキー山岳部	昭和5年7月14日
S-16	4-028	楠郷山誌	南九州山岳会・編		白鳳社	大正15年10月15日
S-2	4-029	雲の上の道	深田久弥		新潮社	昭和34年6月30日
S-16	4-030	雲を掴む話	藤原咲平		岩波書店	大正15年3月1日
S-1	4-031	黒部峡谷	冠 松次郎		アルス	昭和3年7月14日
S-10	4-032	原野から見た山	坂本直行		朋文堂	昭和32年8月10日
S-1	4-033	高山の美を語る	吉田 博		実業之日本社	昭和6年6月24日
S-1	4-034	甲武相・山の旅	今井重雄		天佑書房	昭和17年4月15日
S-7	4-035	小島烏水	近藤信行		創文社	昭和53年1月30日
S-16	4-036	山岳語彙採集帖	角田吉夫・編		日本山岳会	昭和11年12月15日
S-16	4-037	山岳講座 第二巻	木暮理太郎		共立社	昭和10年12月15日
S-16	4-038	山岳写真のうつし方	額田 敏		玄光社	昭和7年12月19日
S-16	4-039	山岳趣味	小島烏水、横 有恒		大阪毎日新聞社/ 東京毎日新聞社	昭和3年8月5日
S-1	4-040	日本山岳文献ノート	坂戸克己・清水忠雄		清水書店	昭和7年11月15日
S-1	4-041	山岳文學	小島烏水		太陽出版社	昭和19年8月20日
S-16	4-042	山水往来	遅塚麗水		良明堂書店	明治43年7月12日
S-2	4-043	山頂山麓	深田久弥		青木書店	昭和17年7月20日
S-2	4-044	山頂の憩い	深田久弥		新潮社	昭和46年9月15日

## 分類Ⅳ：日本での登山に関する図書 (2/3)

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-8	4-045	山麓亭百話 上	横山厚夫		白山書房	平成11年7月20日
S-8	4-046	山麓亭百話 下	横山厚夫		白山書房	平成13年11月10日
S-8	4-047	山麓亭百話 中	横山厚夫		白山書房	平成12年7月20日
S-1	4-048	静かなる登攀	高須 茂		朋文堂	昭和16年7月15日
S-1	4-049	静かなる山の旅	河田 楨		自強館書店	昭和2年5月10日
S-16	4-050	社会研究 高原生活	伊藤銀月		日高有倫堂	明治39年10月10日
S-16	4-051	写真で見る日本山岳会の100年	日本山岳会資料映像委員会		日本山岳会	平成17年10月15日
S-2	4-052	瀟洒なる自然	深田久弥		新潮社	昭和42年11月30日
S-18	4-053	昭和写真・全仕事 SERIES 2 [白川義員]			朝日新聞社	昭和57年4月1日
S-16	4-054	処女地征服 大利根水源紀行	利根水源探検隊		精華堂書店	昭和3年7月1日
S-7	4-055	森林・草原・氷河	加藤泰安		茗溪堂	昭和41年9月
S-16	4-056	スキーイング	笹川速雄		目黒書店	昭和2年1月5日
S-16	4-057	スキー登山	船田三郎		目黒書店	昭和4年11月20日
S-7	4-058	すこし昔の話	初見一雄		茗溪堂	昭和44年8月20日
S-18	4-059	雪原の足あと	坂本直行		茗溪堂	平成11年9月1日
S-18	4-060	田淵行男 山岳寫眞傑作集	田淵行男		朝日新聞社	昭和26年6月5日
S-1	4-061	単獨行	加藤文太郎		朋文堂	昭和16年8月25日
S-7	4-062	小さな頂	一原有徳		茗溪堂	昭和49年10月
S-8	4-063	峠と高原	田部重治		大村書店	昭和6年7月8日
S-1	4-064	登山者	四谷龍胤		朋文堂	昭和16年11月5日
S-16	4-065	登山必携 山嶽めぐり	石上録之助		鈴木書店	大正8年6月25日
S-16	4-066	十和田讃歌	一戸義孝・編		誠文堂新光社	平成3年5月5日
S-1	4-067	夏の山 冬の山	小島六郎		明玄書房	昭和26年6月30日
S-8	4-068	日本南アルプス 附 甲斐と秩父の山旅	平賀文男		博文館	昭和4年6月27日
S-18	4-069	日本図會全集 (日光山志・日本名山図會)			日本隨筆大成刊行會	昭和4年9月5日
S-18	4-070	日本地理大系 別巻 山岳篇	山本三生・編		改造社	昭和5年6月20日
S-8	4-071	日本登山史	山崎安治		白水社	昭和44年6月13日
S-18	4-072	日本登山地図帳			日地出版	昭和61年10月
S-18	4-073	日本の山岳標高一覧 - 103 山 -	建設省国土地理院・編		日本地図センター	平成3年9月
S-18	4-074	日本の山々 第II集	塚本閣治		山と溪谷社	昭和25年8月1日
S-2	4-075	日本百名山と深田久弥	高辻謙輔		白山書房	平成16年11月25日
S-18	4-076	日本百名山	深田久弥		新潮社	昭和47年10月30日
S-18	4-077	日本南アルプス	白簾史朗		山梨日日新聞社	平成1年11月1日
S-18	4-078	八甲田山	一戸義孝		柄の葉書房	平成6年7月26日
S-8	4-079	花の心 第三十九巻 第四号			竹柏會出版部	昭和10年4月1日
S-7	4-080	遙かな山やま	泉 請一		新潮社	昭和46年11月10日
S-8	4-081	氷河の山旅	田中 薫		朋文堂	昭和18年11月1日
S-1	4-082	屏風岩登攀記	石岡繁雄		碩學書房	昭和24年9月25日
S-8	4-083	風雪のピヴァーク	竹越利治		登歩溪流会	昭和25年1月6日
S-10	4-084	深田久弥旧蔵書目録	国立国会図書館		丸善	昭和51年11月8日
S-1	4-085	冬山・夏山	渡邊公平		鷗居堂書房	昭和23年4月15日
S-16	4-086	北越雪譜	鈴木牧之	岡田武松・校訂	岩波書店	昭和58年3月10日
S-18	4-087	穂高の岩場 1	岩稜会		朋文堂	昭和34年7月15日
S-18	4-088	穂高の岩場 2	岩稜会		朋文堂	昭和35年6月10日

## 分類Ⅳ：日本での登山に関する図書 (3/3)

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-1	4-089	穂高星夜	山崎安治		朋文堂	昭和33年6月1日
S-16	4-090	北海道のスキーと山岳	加納一郎		北海道山岳會	昭和2年11月20日
S-16	4-091	みのる	山内多木		私家版	昭和5年7月10日
S-15	4-092	山 I	申田孫一・編		筑摩書房	昭和35年7月15日
S-15	4-093	山 II	申田孫一・編		筑摩書房	昭和35年11月20日
S-15	4-094	山 III	申田孫一・編		筑摩書房	昭和36年4月10日
S-10	4-095	山 研究と随想	大島亮吉		岩波書店	昭和5年4月25日
S-1	4-096	山 原野 牧場	坂本直行		朋文堂	昭和34年6月25日
S-7	4-097	山・人・本	島田 巽		茗溪堂	昭和51年2月
S-1	4-098	山-紀行と随想-	大島亮吉		好日書房	昭和22年10月10日
S-2	4-099	山さまざま	深田久弥		東西五月社	昭和35年6月
S-8	4-100	山書の森へ	横山厚夫		山と溪谷社	平成9年3月1日
S-7	4-101	山で会った人	松方三郎		築地書館	昭和50年11月20日
S-1	4-102	山と溪谷	田部重治		第一書房	昭和14年6月5日
S-7	4-103	山と書物	小林義正		築地書館	昭和32年7月
S-7	4-104	山と書物 続	小林義正		築地書館	昭和35年3月
S-1	4-105	山と雪の青春	伊藤洋平		三笠書房	昭和33年6月5日
S-1	4-106	山に描く	足立源一郎		古今書院	昭和25年7月29日
S-1	4-107	山に憑かれた男	加藤喜一郎		文藝春秋新社	昭和32年7月20日
S-10	4-108	山に忘れたパイプ	藤島敏男		茗溪堂	昭和45年5月
S-7	4-109	山の憶ひ出 下巻	木暮理太郎		龍星閣	昭和14年6月20日
S-7	4-110	山の憶ひ出 上巻	木暮理太郎		龍星閣	昭和13年12月20日
S-8	4-111	山の心	横 有恒		毎日新聞社	昭和49年5月5日
S-8	4-112	山の古典と共に	大島堅造		茗溪堂	昭和44年9月
S-2	4-113	山の幸	深田久弥		青木書店	昭和16年3月20日
S-16	4-114	山のしづく	別所梅之助		警醒社書店	大正13年9月10日
S-8	4-115	山の人生	柳田國男		郷土研究社	昭和2年11月20日
S-8	4-116	山の千一夜	勝見 勝		双芸社	昭和27年1月20日
S-10	4-117	山の手帖 田淵行男写真文集	田淵行男		朝日新聞社	昭和62年3月15日
S-8	4-118	山の傳説 日本アルプス篇	青木純二	柳田國男・序	丁未出版社	昭和5年7月17日
S-1	4-119	山の仲間	千坂正郎		朋文堂	昭和14年6月20日
S-18	4-120	山の紋章・雪形	田淵行男		学習研究社	昭和56年8月10日
S-18	4-121	山の呼ぶ声	藤木九三・編	藤木九三	(財) 文明協會	昭和3年6月25日
S-16	4-122	山は生きる	今井徹郎		威光館書店	昭和10年5月20日
S-18	4-123	山は知っている	日本山岳会東海支部		マック出版	平成10年5月21日
S-16	4-124	山へ入る日	石川欽一		中央公論社	昭和4年11月1日
S-1	4-125	雪の千一夜	竹節作太		體日本社	昭和24年12月10日
S-2	4-126	わが愛する山々	深田久弥		新潮社	昭和36年7月20日
S-18	4-127	わが山旅	田淵行男		誠文堂新光社	昭和27年8月20日
S-2	4-128	わが山山	深田久弥		東峰書房	昭和23年7月15日
S-2	4-129	をちこちの山	深田久弥		山と溪谷社	昭和27年5月25日

## 分類V:全集 (1/2)

### ●西域探検紀行全集

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-14	5-01	ユーラシア横断紀行	Thomas Witlan Atkinson	水口志計夫	白水社	昭和41年11月5日
S-14	5-02	黄河源流からロプ湖へ	ブルジュワルスキー	加藤九祿・中野好之	白水社	昭和42年9月5日
S-14	5-03	西トルキスタンへの旅 上	Henry Lansdell	大場正史	白水社	昭和43年1月5日
S-14	5-04	西トルキスタンへの旅 下	Henry Lansdell	大場正史	白水社	昭和43年3月5日
S-14	5-05	カラコルムを越えて	F. E. Younghusband	石 一郎	白水社	昭和41年7月10日
S-14	5-06	内陸アジア縦断	Gabriel Bonvalot	朝比奈 諠	白水社	昭和42年9月5日
S-14	5-07	チベット旅行記	河口慧海	長沢和俊・編	白水社	昭和47年8月5日
S-14	5-08	中央アジア踏査記	Sir Aurel Stein	沢崎順之助	白水社	昭和41年9月5日
S-14	5-09	シルクロード探検	大谷光瑞	長沢和俊・編	白水社	昭和48年5月20日
S-14	5-10	シナ奥地を行く	D'OLLONE	矢島文夫・石沢良昭	白水社	昭和43年9月20日
S-14	5-11	蒙古と青海	ピョートル・クズミッチ・コズロフ	西 義之	白水社	昭和42年2月25日
S-14	5-12	西域への砂漠の道	Owen Lattimore	谷口陸男	白水社	昭和42年1月5日
S-14	5-13	中央アジア自動車横断	Georges Le Fevre	野沢協・宮前勝利	白水社	昭和42年5月5日
S-14	5-14	ダットン通信	Peter Fleming	前川祐一	白水社	昭和43年5月6日
S-14	5-15	コンロン紀行	ステファン・イワノヴィッチ・スミグノフ	須田正継	白水社	昭和43年7月5日
S-14	5-16	中央アジア探検史	深田久弥		白水社	昭和46年9月17日

### ●ヘディン中央アジア探検紀行全集

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-13	5-17	アジアの砂漠を越えて (上)	Sven Hedin	横川文雄	白水社	昭和39年7月25日
S-13	5-18	アジアの砂漠を越えて (下)	Sven Hedin	横川文雄	白水社	昭和39年11月20日
S-13	5-19	チベットの冒険	Sven Hedin	鈴木武樹	白水社	昭和41年4月5日
S-13	5-20	トランスヒマラヤ (上)	Sven Hedin	青木秀男	白水社	昭和40年7月20日
S-13	5-21	トランスヒマラヤ (下)	Sven Hedin	青木秀男	白水社	昭和40年9月20日
S-13	5-22	ゴビ砂漠横断	Sven Hedin	羽鳥重雄	白水社	昭和39年9月20日
S-13	5-23	ゴビ砂漠の謎	Sven Hedin	福田宏年	白水社	昭和40年11月20日
S-13	5-24	戦乱の西域を行く	Sven Hedin	宮原 朗	白水社	昭和40年5月20日
S-13	5-25	シルクロード	Sven Hedin	西 義之	白水社	昭和40年1月20日
S-13	5-26	さまよえる湖	Sven Hedin	関 楠生	白水社	昭和39年6月20日
S-13	5-27	探検家としてのわが生涯	Sven Hedin	山口四郎	白水社	昭和41年1月20日

### ●ヒマラヤ《人と辺境》

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-15	5-28	幻の探検家ネイ・イライアス	Ney Elias	吉沢一郎・齊藤明子	白水社	昭和51年4月20日
S-15	5-29	国境のかなた -大探検家ベイリーの生涯-	Arthur Swinson	松月久左	白水社	昭和50年12月20日
S-15	5-30	青いケシの国	Frank Kingdon Ward	倉知 敬	白水社	昭和50年8月20日
S-15	5-31	異教徒と氷河 -チトラール紀行-	R. C. F. Schomberg	雁部貞夫	白水社	昭和51年2月20日
S-15	5-32	ヒマラヤ巡礼	David Snellgrove	吉永定雄	白水社	昭和50年10月20日
S-15	5-33	カラコルムからパミールへ	Harold William Tilman	薬師義美	白水社	昭和50年6月20日
S-15	5-34	ダットンの山々	Eric Shipton	水野 勉	白水社	昭和50年5月20日

## 分類V:全集 (2/2)

### ●ヒマラヤの高峰

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-15	5-35	ヒマラヤの高峰 第一巻	深田久弥		雪華社	昭和39年6月30日
S-15	5-36	ヒマラヤの高峰 第二巻	深田久弥		雪華社	昭和39年9月15日
S-15	5-37	ヒマラヤの高峰 第三巻	深田久弥		雪華社	昭和39年12月15日
S-15	5-38	ヒマラヤの高峰 第四巻	深田久弥		雪華社	昭和40年3月30日
S-15	5-39	ヒマラヤの高峰 第五巻	深田久弥		雪華社	昭和40年10月20日

### ●東洋文庫

棚番号	番号	書名	著者	訳者	発行所	発行年月日
S-13	5-40	楼蘭 流砂に埋もれた王都	Albert Herrmann	松田寿男	平凡社	昭和38年10月10日
S-13	5-41	アンコール踏査行	Louis Delaporte	三宅一郎	平凡社	昭和50年7月1日
S-13	5-42	東方見聞録 1	マルコ・ポーロ / Aldo Ricci	愛宕松男	平凡社	平成6年8月1日
S-13	5-43	東方見聞録 2	マルコ・ポーロ / Aldo Ricci	愛宕松男	平凡社	平成6年11月10日
S-13	5-44	日本その日その日 1	Edward Sylvester Morse	石川欽一	平凡社	平成11年7月21日
S-13	5-45	日本その日その日 2	Edward Sylvester Morse	石川欽一	平凡社	平成4年12月25日
S-13	5-46	日本その日その日 3	Edward Sylvester Morse	石川欽一	平凡社	昭和63年5月10日
S-13	5-47	日本奥地紀行	Isabella L. Bird	高梨健吉	平凡社	平成6年7月11日
S-13	5-48	大唐西域記 1	玄奘	水谷真成	平凡社	平成12年7月7日
S-13	5-49	大唐西域記 2	玄奘	水谷真成	平凡社	平成14年9月20日
S-13	5-50	大唐西域記 3	玄奘	水谷真成	平凡社	平成14年9月20日
S-13	5-51	中国奥地紀行 1	Isabella L. Bird	金坂清則	平凡社	平成14年10月24日
S-13	5-52	中国奥地紀行 2	Isabella L. Bird	金坂清則	平凡社	平成14年12月18日

# 針葉樹文庫目録

## 人名索引

この索引は、著者・翻訳者・編集者・監修者（いずれも個人または団体）などの人名のほか、書名に記入された人名についても検索できるようにした。

**目録の人名表記：**洋書は、当然ながら、すべて英語（アルファベット）表記である。翻訳書の著者名も、判明するかぎり、英語（アルファベット）表記となっている。

**「人名索引」の見出語：**洋書の人名のすべてと翻訳書の著者名の大半は、英語である。英語人名は、例えば、Weston, Walter. ではなく、Walter Weston となっている。

- 注：・分類番号 3-202『四姑娘山群』は目録では列幅の制約から姓のみで表記したが、この「人名索引」の見出語では完全な姓名で表記した。
- ・分類番号 1-25『奥秩父 前田・古澤・長沼三君追悼録』は目録にあるとおり実際の書名は姓のみであるが、この「人名索引」の見出語では括弧内に名も表記した。

## ア行

青木純二	20
青木秀男	21
青木文教	16
朝日新聞社	12, 14, 16
朝日教之	16
朝比奈誼	21
愛宕松男	22
足立源一郎	20
阿部幹雄	16
甘利仁朗	10
荒井道太郎	15
安藤 勉	14
安東小千世	14
石 一郎	14, 15, 21
石上 茂	12
石上録之助	19
石岡繁雄	19
石川欽一	20, 22
石川善次郎	11
石沢良昭	21
泉 請一	19
一戸義孝	19
一原有徳	19
井手賁夫	14
伊藤銀月	19
伊藤洋平	14, 20
稲川正一	16
今井重雄	18
今井徹郎	20
今西錦司	17
芋川稔一	10

岩崎利一	10
岩坪五郎	16
岩間正夫	16
ウインパー	11
上原利夫	10
ウォルター・ウェストン	14
浦松佐美太郎	11, 12
江上 康	16
越後宏治	16
エリック・シプトン	11
大賀二郎	10, 12
大島堅造	20
大島亮吉	20
大谷光瑞	21
太田又一	10
太田可夫	11
大塚 武	10
大蔵喜福	16
大場正史	21
岡沢祐吉	13
岡田昭夫	12
岡田武松	19
岡村精一	14
奥又四郎	14
奥村一郎	12
小谷部全助	10

## カ行

カール・メルクル	14
海津正彦	14
柿原謙一	10
風見武秀	18

楫山正雄	18	建設省国土地理院	19
勝見 勝	20	玄奘	22
加藤喜一郎	20	国立国会図書館	19
加藤泰安	19	木暮理太郎	18, 20
加藤泰三	18	小島烏水	18
加藤文太郎	19	小島六郎	19
加藤九祚	21	近藤 等	11, 14, 15, 16
金子晴彦	10	近藤信行	18
金坂清則	22	小林重吉	10
金田一郎	10, 12	小林隆康	18
加納一郎	14, 20	小林義正	20
上岡祐二	16		
河口慧海	14, 16, 21	<b>サ行</b>	
川崎精雄	12	齊藤明子	21
川崎隆章	18	坂戸克己	18
河田 楨	18, 19	坂本直行	18, 19, 20
神原 達	14	笹川速雄	19
冠 松次郎	18	佐々木喜善	18
雁部貞夫	11, 16, 17, 21	佐々木孝雄	16
岳人編集部	12	佐々木 誠	10
岩稜会	19	佐藤武雄	18
菊地俊朗	16	佐藤テル	11
京都大学学士山岳会	16	佐藤久尚	10
京都大学山岳部	16	佐薙 恭	10
金田一京助	18	沢崎順之助	21
串田孫一	20	信濃教育會下伊那部會	18
久保孝一郎	12	柴田京子	15
熊澤正夫	18	島田 巽	14, 20
倉知 敬	10, 11, 12, 21	清水忠雄	18
桑原良敏	16	清水達雄	10
桑原武夫	16, 18	庄田元男	18
桑原正人	11	ジョージ・マロリー	14

白川義員	19	田村協子	11
白簾史朗	19	大 建二郎	10
針葉樹会	10	千坂正郎	18, 20
スイス山岳研究財団	11	遅塚麗水	18
菅原清治	14	角田吉夫	18
杉山雅夫	11	津田正夫	16
鈴木 勝	15	塚本閣治	19
鈴木武樹	21	手塚晴雄	10
鈴木牧之	19	東亜考古學會蒙古調査班	17
鈴木羊三	12	東京商科大学一橋山岳部	10
須田正継	21	東京大学カラコルム遠征隊	16
ステファン・イワノヴィッチ・スミグノフ	21	利根水源探検隊	19
諏訪田栄蔵	17	友田純一	10
関 楠生	21	ド・ラ・クロワ	14
		土居道彦	18

夕行

高崎俊平	10
高澤光雄	18
高須 茂	19
高瀬進三	10
高辻謙輔	19
高津幸枝	14
高梨健吉	22
高橋次郎	18
竹越利治	19
武田和美	16
竹節作太	20
田中 薫	19
田辺主計	12, 14
谷口陸男	21
田淵行男	18, 19, 20
田部重治	19, 20

ナ行

永井 剛	16
長井一男	14
長越茂雄	14
長沢和俊	14, 21
中島 寛	11
中島嘉一郎	10, 12
長沼(廣次)	10
中西 章	12
中野好之	21
中村 保	11
中村輝子	14
夏川道子	14
新島義昭	11
西 義之	21
日本木斯塔格阿塔山群登山隊 1995	17

日本山岳会	17
日本山岳会資料映像委員会	19
日本山岳会東海支部	20
額田 敏	18
ネイ・イライアス	21
野沢 協	21
ノルウエー隊 (Arne naess)	12

### ハ行

芳賀孝郎	14
橋本 明	10
長谷川四郎	14
初見一雄	19
羽鳥重雄	21
浜田平太郎	16
早川孝太郎	18
林 俊介	10
原 全教	18
日江井正巳	10
平井 剛	16
平井一正	16
平賀文男	19
平林克敏	16
ヒラリー	12
蛭田弥希	17
広島三朗	14
ピョートル・クズミッチ・コズロフ	21
深田久弥	15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22
福田宏年	11, 21
藤木九三	14, 20
藤島敏男	20
藤田弘基	17

藤原咲平	18
船田三郎	18, 19
船本文治	10
古澤 (孝平)	10
ブルジェワルスキー	21
ヴェ・カ・アルセーニエフ	14
ベイリー	21
別所梅之助	20
ベッティナ・セルビー	15
細野伸二	10
堀岡 清	10
堀口大學	15

### マ行

米田篤裕	10
前川祐一	21
前田 (道夫)	10
前野光弘	11
楨 有恒	17, 18, 20
牧野 昇	14
牧野文子	14, 15
増山清太郎	10
松井 博	15
松方三郎	16, 20
松下順吉	12
松田寿男	22
松月久左	21
松永敏郎	16
松原尚之	16
松本重男	14
マルコ・ポーロ	22
水口志計夫	21

水谷真成	22
水野 勉	11, 12, 14, 16, 17, 21
三井嘉雄	14
三森茂充	10
南会津山の会	18
南九州山岳会	18
峰高教通	10
三宅一郎	22
宮下克彦	10
宮下啓三	11
宮原 朗	21
宮前勝利	21
宮森常雄	16
村上啓夫	14
村木潤次郎	17
茂木明俊	10
茂木慎雄	18
望月達夫	10, 11, 12
森川眞三郎	10

**ヤ行**

薬師義美	11, 14, 17, 21
矢島文夫	21
安川茂雄	15, 18
柳田國男	18, 20
山内多木	20
山口四郎	21
山口耀久	14
山崎安治	19, 20
山田二郎	16
山田哲郎	12, 18
山田亮三	10, 12

山と溪谷社	16
山中健雄	10
山野井裕義	11
山本三生	19
山本健一郎	11, 12
山本尚禎	10
山森欣一	16
横川文雄	11, 14, 21
横山厚夫	12, 18, 19, 20
吉沢一郎	10, 11, 12, 16, 21
吉田 博	18
吉田義則	10
吉永定雄	11, 14, 21
吉村千春	16
四谷龍胤	19

**ラ行 ワ行**

ラインホルト・メスナー	14
リビングストーン	14
渡邊公平	19
渡邊玉枝	16

- A**
- A. Emmons ..... 12  
A. F. Mummery ..... 13, 14  
A. Heckmair ..... 14  
Alan Blackshaw ..... 13  
Albert Egger ..... 14  
Albert Herrmann ..... 22  
Aldo Ricci ..... 22  
Andre Cahmson ..... 15  
Andre Roch ..... 13  
Apsley Cherry-Garrard ..... 14  
Arthur B. Emmons ..... 13  
Arthur Swinson ..... 21
- B**
- Brigadier Sir John Hunt ..... 14
- C**
- C. S. Houston ..... 14  
Ch. v. f. Haimendorf ..... 13  
Chris Bonington ..... 13  
Charles Evans ..... 14
- D**
- David Robertson ..... 14  
David Snellgrove ..... 21  
D'OLLONE ..... 21
- E**
- E. N. Bowman ..... 13  
E. R. Simonson ..... 14  
E. Schneider ..... 13  
Edward Sylvester Morse ..... 22  
Edward Whymper ..... 11  
Eric Shipton ..... 12, 21
- F**
- F. E. Younghusband ..... 21  
F. S. Smythe ..... 15  
Fosco Maraini ..... 13, 14, 15  
Frank Kingdon Ward ..... 21  
Frank Sydney Smythe ..... 11
- G**
- G. Herzog ..... 15  
G. O. Dyrenfurth ..... 13  
Gabriel Bonvalot ..... 21  
Gaston Rebuffat ..... 15  
George Lowe ..... 14  
Georges Kogan ..... 14  
Georges Le Fevre ..... 21  
Gerald Morgan ..... 13  
Guide Rey ..... 15  
Guido Magnone ..... 14
- H**
- H. Harrer ..... 14  
H. W. Tilman ..... 14  
Hans Morgenthauer ..... 15  
Harold William Tilman ..... 21  
Henry Heek ..... 14  
Henry Lansdell ..... 21  
Herbert Tichy ..... 14  
Hermann Buhl ..... 14
- I**
- Isabella L. Bird ..... 22
- J**
- J. D. Hooker ..... 14  
J. H. B. Bell ..... 13  
J. Hemmleb ..... 14  
J. T. Young ..... 12

Jean Franco	15
Jim Curran	12
Joe Simpson	14

### K

Karl M. Herrlichkoffer	14
Kenneth Mason	12

### L

L. A. Johnsonl	4
L. Lachenal	15
Louis Delaporte	22

### M

Malcolm Slessor	13
Maurice Herzog	14
Max Eiselin	14

### N

Ney Elias	13, 21
Nicholas B. Clinch	13, 14
Nicole Leininger	14
Norman Hardie	14

### O

Owen Lattimore	21
----------------	----

### P

Paulcke	15
Peter Fleming	21
Peter Steele	11

### R

R. Burdsall	12
R. C. F. Schomberg	14, 21
R. H. Bates	14
Ralph Barker	14

Raymond Lambert	15
Rene Desmaison	14
Riccardo Cassin	14
Richard Grant	13
Richard L. Burdsall	13
Robert William Sandford	14
Rogh Frison-Roche	14

### S

Samuel Brawand	14
Sir Aurel Stein	21
Sir Edmund Hillary	12, 14
Sir Francis Younghusband	14
Suke Okazawa	13
Sven Hedin	21

### T

T. Moore	12
Tamotsu Nakamura	11
The Swiss Foundation for Alpine Research	13
Thomas Witlan Atkinson	21
Tom Longstaff	12
Toni Hagen	13

### W

Walter Bonatti	15
Walter Cecchinell	15
Walter Weston	14
Wilfrid Noyce	11, 15
Wilhelm Steinitzer	14
William Martin Conway	11

### Y

Yves Malartie	14
---------------	----

### Z

Zsigmoudy	15
-----------	----

# 針葉樹文庫

## － 附録もくじ－

富士山に関する文献の蒐集に就いて 会員諸君にお願い（増山清太郎） .....	33
校正恐るべし（山本健一郎） .....	35
針葉樹と一橋山岳部（吉沢一郎） .....	37
針葉樹文庫はわが伝統の証し（上原利夫） .....	41
一橋山岳部と針葉樹会の登山探検記録（倉知 敬） .....	42
山本健一郎さんとの関わりなど（竹中 彰） .....	45
山本健一郎さんのミニヤ・コンカ（蛭川隆夫） .....	46
写真：「マッチ箱」（小谷部全助・撮影） .....	48
北岳バットレス第4尾根でのアップザイレン（昭和12年1月5日）	
‘宿帳’（小谷部全助／森川真三郎・記帳） .....	49
北岳バットレス第1尾根、第4尾根を初登攀して、 芦安村大曾利の青木方へ戻り、記帳（昭和12年1月9日）	

# 富士山に関する文献の蒐集に就いて 会員諸君にお願い

増山清太郎

一時流行を極めた山岳図書蒐集熱が、近頃急に衰えて古本の値段は下るし、一度流行したお陰で、商品価値の低い本も埋れてしまわないので、山の本を集めるには大変好都合の御時世になって来ました。こうした事を筆にするにも、時流に銜う嫌がなくて好いです。

処で近頃富士山に関する文献を蒐集しています。学校を卒業する頃に考えた。これからは今までのように山にも登れまい。その腹癒せに山の本でも集めて見ようかと。併しあらゆる山の本を集めるのは、不可能且無意味ですから、方面を限らなければいけない。色々考えた末に、富士山に関する図書か、或は遭難報告類が面白いと思ったのですが、後者は縁起でもなし、殆ど入手不可能のものも多く、加之当時春日何とかという男が「日本山岳遭難史」とか云うインチキ極らない続物を『山と溪谷』に載せていたのでそれに顔負けして、陳腐乍ら富士山の方を始めた訳です。

さて象牙の塔を追われて見ると、幸に恩師幸田教授のよき御理解の下に、案外山に行ける、二年間に五十幾日かを山に送りました。そんな訳で山に費すべき時間と精力と費用が、殆ど全部実際の山行に費されて、本の蒐集や針葉樹会の為に働く事などは、兎角怠り勝です。けれどもこうした事業は独りで頑張っても出来ない訳ですから、誌上を借

りて会員諸君の御協力を願う次第です。

富士山に関する文献の数と量は、実に夥しいものでしょう。従来も故曾我部一紅を始として、蒐集に努めた人も何人かあるようですが、小生は一寸目先を変えて、左の方針で行きたいと思います。

- 1 時代を明治以後に限ること
- 2 全篇を富士山に費していないでも、富士山に関する記事を含む 単行本及び新聞雑誌を蒐集に加えること
- 3 蒐集に先行して「富士山文献目録」を作製すること

斯くの如くにして、現在目録に約四百種の文献が再録せられ、内二百種足らずが小生の書架にあります。前途遼遠、ざっと二十年も経ったら目鼻がつくでしょう。

処で諸君にお願いしたいのは、何たるを問わず富士山に関する記事を御覧になったならば、その著者、論文の題名、所載雑誌(或は単行本) 発行年月日、発行所を小生まで御知らせ願えれば幸甚に存じます。題名に「富士」という字が出て来ないものと、今後発表されるものは、特に見逃し易いですから御注意を戴くようお願い致します。近頃随分いろいろな山岳雑誌があるようですが、その月々の「山岳文献目録」といったようなもの——これなぞは日本山岳会あたりで作って呉れると山岳界を裨益すること少くないのですが——が発表されていない今日、私が独りで

目を皿のようにして見張っていても、見逃しは随分多いと思うからです。御注意の重複して来ることは少しもいけません。

現在迄に管見に入った文献の中、比較的興味を感じたもの（奇観書という意味でなく）

を二三次号以下に解説して見たいと思います。今までとて決して秘密にやって居た訳ではありませんから、こう云えば一部の諸君は「来月はあれだな」と思い当たるでしょう。

編集子の注：本編は、『針葉樹会報』第6年第4号（1935年5月15日発行）から転載しました。増山は、「富士山文献解題」と題して、本号のあとの『針葉樹会報』に4回にわたり解説しています。増山が解説した単行本を紹介しておきます。

野中至 『富士案内』明治34年8月 春陽堂発行

野中千代子 『芙蓉日記』明治32年7月 北隆館発行

落合直文 『高嶺の雪』明治29年9月 明治書院発行

『丸山教祖一代記略』明治36年12月 明治書院発行

増山の解説はさらに雑誌・会誌所載の記事十数編に及び、それらを読むと増山の愛書家振りがよくわかります。

漢字の字体、送りがな、仮名遣いを現在行われているものに変えたほか、明かな誤字と句読点の間違いも訂正しました。

# 校正恐るべし

山本健一郎

「後生畏るべし」ならぬ「校正恐るべし」を実感する羽目になるとは、思いませんでした。

『ミニヤコンカ初登頂』（1998年、ナカニシヤ出版）が完成し手元に届いた日、わたしは早速読み始めました。第3章に入ってあっと思いました。第2章の末尾（p. 38）で「スミスと忠僕ペムに別れを告げて（中略）成都に向かった」とあるスミス氏が第3章（p. 41）でまたも登場するではありませんか。わが目を疑いました。慌てて原文に当たると‘left with’とあり、「スミスと忠僕ペムと共に成都に向かった」と訳さなければなりません。ゲラ刷りに目を通すこと10回近く、どうして気が付かなかったのか恥ずかしい限りです。ゲラのチェックはかなり根を詰めた仕事、一つの章が終わると一休みするか、翌日回しにしていました。いくつかの章を通読していれば気が付いたかもしれませんが、もう後の祭です。

次のお粗末は繰り返し出てくる「伝導団」です。もうおわかりでしょう。「伝道団」が正解です。これは日本山岳会々員の横山厚夫・河野直子さんお二人からご指摘を受けました。指摘されるまでまったく気が付きませんでした。わたしの弟は先年この世を去りましたが、栄光から上智の神学科に進

み、ヴァチカンで7年を過ごしたカルメル会の神父でした。弟に見つけられなかっただけでも幸いと思わなくてはなりません。神よ、わたしをお導きください。

また「訳者あとがき」（p. 257）でこの山での日本隊の活動に触れ、1981年の北海道岳連隊は雪崩のため8名の犠牲者を出されたと書きましたが、これは雪崩に遭われたのではなく、転落事故でした。1997年に札幌山岳会の遠征隊が日本隊としてはじめて登頂に成功しましたが、このときの登頂者横山英雄さんからご指摘を受けました。1981年わたしはシンガポールに住んでいて、地元の新聞に出た記事の記憶を頼りに、よく調べもせず書いてしまいました。関係者各位にお詫び申し上げます。

ご指摘くださった横山厚夫さん、河野直子さん、横山英雄さんにあらためてお礼申し上げます。望月達夫さんのご命令では仕方ありませんが、分不相応にも本を出したりするからこんな大恥をかくのだと肝に銘じています。

編集子の注：山本は、自らが翻訳した『ミニヤコンカ初登頂』を先輩や友人に謹呈していました。編集子も、伯耆大山の山旅にお誘いしたときに、後輩ながら謹呈を受ける光栄に浴しました。本編は、そういう謹呈先に山本が出した手紙です。ここに収めるにあたり、手紙にはない題目を付けました。同書の「訳者あとがき」の冒頭を引用します。

1935年に刊行されたこの本の原著はなかなかの稀覯本で、日本に何冊もないだろうといわれている。わたしは望月達夫さんのお勧めで、望月さん所蔵の本をお借りして翻訳を進めたが、これは現在日本山岳会に寄贈された望月文庫に収められている。(中略)。

吉沢一郎さんもこの本をお持ちのようだが、蔵書の山に埋もれて出てこないらしい。戦前に東京商大(現一橋大学)山岳部が、ミニヤ・コンカを目指して調査研究を進めていたことはあまり知られていないが、その結果としてこの珍しい本が両先輩の手元にあり、後輩のわたしが翻訳を手掛けることになったのも不思議な縁である。また当時の研究の成果を望月さんが昭和15年に「ミニヤ・ゴンカ山群」という題で『山岳』35年2号に発表している。

針葉樹文庫は、「1935年に刊行された」MEN AGAINST THE CLOUDSも、望月達夫の「ミニヤ・ゴンカ山群(支那西康省)」も所蔵しています。後者は、厳密には、『山岳』第35年第2号ではなく、その別冊です。

# 針葉樹と一橋山岳部

吉沢一郎

今私の机の上には『針葉樹』の合本が2冊、これは1号から3号までと4号から6号までの分で、1冊ずつになっているのが7、8及び9号の3冊ある。

それから『針葉樹会会報』というのが1号から50号まで1冊に合本され、あいだが抜けて53号から99号までがバラバラで袋の中に入っている。それからこれの復刊の1号から3号まで。最後に『一橋山岳部々報』というのが1号から6号まで纏めて1冊になっている。

私が持っているわれわれの学校の山岳部に関連した資料は、以上のものだけしかない。戦争や転勤や引越しのおかげで、かなりなものがなくなったり焼けたりしてしまっただが、買えるものは自分の経済不相応に集め戻した。だが昔持っていたものを完全に元通りにすることはいまさらできそうもない。それでも今自分の部屋に並べてある本を片っ端から読み上げてしまうには、そしてまたその間には新しい本もドンドン加わっていくことであろうから、とても残りの生存期間だけでは間に合いそうもない。

私ももう満55才と3カ月を過ぎ、普通の会社なら追払われるか嘱託位にされるかで、第1巻の終りというところであったろうが、厳しいが人情家の社長をいただくわが電通では、身体が頑健で何かに使える間は、といっても60才までだが居すわりお構いなしということ

で、とに角元気で毎朝7時15分には会社の自分の席に腰かけているという次第である。

(中略)

本題とは大部離れてしまったようだが、昔の東京商科大学の山岳部は、ちょうど私がその予科に入学した大正11年に出来上がったのである。何年何月何日にどこで発会式ということになると調べればわかることであろうが、今ははっきり覚えていない。その辺のことになると、まるで百科辞典のように何でも知っており、今は協和銀行の審査部次長をしている増山清太郎君に聞けばよい。

大体、私のような人間が第1期生なのだから、商大山岳部の最初の程の行き方などもほぼ想像が出来ようというもの。当時、学年の上での先輩はいたが、山登りの分野ではみんなボチボチの同期生で、歩く位のことは知っていたかもしれないが(口や手は八丁以上の人種が多かった)、高い山など登った人間は一人もなく、ましてスキーの技術など身につけていたのは長岡出身の現在は高崎製紙の専務をやっている松木謙三君位のものであった。それもTの字を逆さまにした棒立スキーであった。長岡流は当時みんなそうだったらしい。

ところで『針葉樹』の第1巻がガリ版刷で出たのは1925年(大正14年)であった。表紙にはマッターホルンみたいな山が描いてあるが、これは多分私がかいたものだと思う

ている。そして、この第1巻は「針葉樹」となっていないで『東京商科大学一橋山岳部年報』というふうになっている。年報の名称が「針葉樹」となったのは第2号からのようだ。第2号から活版刷になった。その表紙の秩父の絵も私がかいたらしい。何か写真でもみながらかいたのに違いない。甲武信からみた木賊のようでもある。

「針葉樹」という名称も私がつけたか、私の提案が皆に採用されてそうなったものと覚えている。早稲田の山岳部の年報を1頁1頁めくっていった何かいい名前はないかと探していた。たまたま会田氏の書いた秩父の紀行文の中に、針葉樹という3字をみつけて、これだこれだということで結局そうなったのである。

当時私達は早稲田の一部の人達と同じように、秩父の山がとても好きだった。『一日二日山の旅』という本を案内書にして、私達は春夏秋冬秩父を歩いた。10日も歩き廻ったこともある。岩登りらしいものもやるにはやったが、ピトンやカラビナを使うようなところへはいかなかった。いわば、山歩きの、少し毛の生えた程度であつたらう。ボーゲンも出来ないうちに岩菅山のスキーでの初登頂をやったこともある。それでも在学6年(7年ではない)の間に多少の経験が積んで来て、3月の針ノ木峠のスキー越えにはじめて成功したのはわれわれであつた。

東大谷に入って剣に出たことがあるが、これがとに角左俣だつたとはいへ、東大谷、早月尾根経由で剣の頂を極めた最初のものであつたとは、その時は実は知らなかつたのである。立教の人達が5月に初登攀した右俣の頭にある「カニノハサミ」というのは、実

はその時私がつけた名称で、今でもそれがいろいろな案内書に使われているのは愉快である。これは富山高校から京大へ行き、また後にアンナプルナへも試登した藤村氏あたりが使ってくれたことも、原因の一つになっていると思う。

第3号は1927年に出たが、表紙の針葉樹という字は、大先輩の江口定条さんに書いてもらったのである。江口さんは明治何年かに一橋を出て、後に三菱の大御所になり、貴族院議員や満鉄副総裁なんかもやったことがある。70才位の時松浦氏やその他私も含めた数人で穂高のいわゆる逆縦走をやつた人だ。とても元気なおじいさんであつた。この人の3男は浅間温泉の大きな宿屋の娘さんを貰って今も元気で活動している。学生時分少し赤味がかかつていたので、おやじさんが心配して、山へでも連れていったら赤(ヒフの上につくアカではない)も少しはとれるだろうからとて、私達三井化学の近藤常務、石油荷役の村尾常務(常務なんていうと本人は恥かしがらう)といった私達に教育(?)を依頼された。その結果私達の指導よろしきを得たのかどうだか知らないが、今は立派な真人間になって、牛や豚や鶏のエサを作つて売る会社の重役になっている。山はありがたいものである。

私も今は広告会社の1社員だが、広告といへば『針葉樹』のはじめの頃の広告は自分達でとつて歩いたものだつた。どこの大学の山岳部でも同じだつたであらうが、何とかツテを求めて重役に会つたり、宣伝部課長にお願いしたりして集めて廻つたが、牛込のツクド八幡の前の津布久のおやじ、新富町の片桐のガンゴジイ、赤木の猪谷のオッサン、

野沢の酒屋のジイサン、バアサン、若旦那等々、皆広告でも、われ等の『針葉樹』の育ての親となった人達だ。槍の穂刈、燕の赤沼さん達もそうだった。

第7号が出たのが昭和9年(1934年)だから、商大山岳部が本当にむずかしい山登りをはじめたのは私達のグループが学校を出た(昭和3年)あとのことになる。北海木材の社長で毎月東京、札幌間をJALで飛んでいる堀岡清君あたりから本格的になってきた。いま三井信託の人形町支店長に納まっている望月達夫君は、私とは10年違う。彼や今はなき小谷部全助、森川真三郎あたりが鹿島槍や北岳のマッチ箱なんかに挑戦して行ったのは、昭和10年からで、このことは第9号に出ている。小谷部は「ジンギス汗は義経なり」で有名な小谷部の息子である。学校を出て住友に入ったが山登りと酒で身体をこわしてしまった。テレビをみていると眼疾や脳溢血になるといった人がいるかいけないか知らないが、何事でも程度を越したら悪いにきまっている。

小谷部は理論家でもあった。岳連のことか何かで全助と大ゲンカをやったこともあるように覚えているがとに角腹は大きかった。元気もあった。肺病で死ぬとは夢にも思わなかったのである。

望月君の活動については皆さん先刻御承知だが、筆に足によくいつまでも元気がつづくもので、最近でもチョイチョイ関東北辺の山々にまめに出かけしているようである。この点は前出の同輩近藤、村尾の両氏も同じ、山へ行かないのは私だけという現状である。その腹いせという訳でもないが、まあ当分は誰がどんなことをいおうとおかまいなしに、人の

登った記録を読んで整理して『山日記』のお手伝いでもすることに満足していよう。いつかはまた、冠さんのように長い山旅の出来る日がやって来ないでもないのだ。

話がどうもいつの間にか、自分中心になってしまってまことに恐縮だが、今は登攀史を書いている訳ではないので御勘弁願いたい。

どういう訳かは忘れてしまったが、山岳部には『針葉樹』の他に『一橋山岳部々報』というのが大正14年から出ており、第2号は昭和5年、第3が6年、第4も6年、これの編集者は現に山一証券の取締役で名古屋支店長をやっている小川竹夫君となっている。5も6も6年で、しかもそれで終わっている。これは不思議な存在である。

最後に針葉樹会の会報がある。これは第1号を昭和5年に出している。つまり私達のグループが卒業して2年目から発行をはじめていることになる。この頃は一橋山岳部と針葉樹会を切り離し、学校の山岳部員だった者が社会に出ると、自動的にOBグループの針葉樹会員になるということであったらしい。この会報には必ずしも山登りの記事だけではなく、会員の消息、短信、その時々随想というものが載せられていったようで、会員以外の方が読んでもわからないし、少しもおもしろくないものである。しかしとに角、われわれには大変懐しい印刷物であった。これも第6年第4号、つまり昭和10年5月に発行された第46号から活版刷となり、第13年第2号(昭和17年10月発行)すなわち通巻では99号まで、少なくともその形式で発行がつづけられていた。もともと、世の中がその頃は、大分騒々しくなり、物資も窮屈になってきたので、紙の質は多少悪くなっている。

戦争がすんでそろそろ落ち着いてきた頃になって、この会報はふたたび復刊され、その第1号が昭和27年9月に出た。2号が28年11月、3号は30年6月。私のところにはそれだけしかない。

以上で大体一橋山岳部関係の出版物(追悼のための特別のものは除く)は全部紹介したことになるのであるが、前の方で書いておくべきものでもらした事柄を少し加えておこうと思う。

『針葉樹』の第1号の編集後記を読むと、筆者名は書いてないが、文章をみると下手くそなので多分私が書いたものと思うが、こんな風になっている。(違っていたら御勘弁)。

「3年前だ!同好者が集って、あの思い出深い今のA教室あたりにあった(震災で焼けてしまったのだ)学生集会所の穢らしい2階の隅でわが山岳部が呱呱の声をあげたのは。其の当時は一橋山岳会と称してほんの5、6人が集って、ただ夏の山に登って喜んでいかに過ぎないものであった……」

しかし私には、この時のことが全然頭に残っていない。(中略)

針葉樹会で上から下まで一堂に会する会は年に1、2度、神田の如水会館でやってい

るが、もうわれわれと学生諸君とでは年からいって3、40年の開きが出来ている。まったく早いものである。

今の学生諸君の山登りを実際にそばで見たことはないのであるが、皆真面目に派手なこともやらずにもくもくと登っているらしい。それでいいのだ。山登りの最終段階はヒマラヤであるかも知れない。だからそれを目標に精進をつづけることももちろん結構である。だが、ヒマラヤを目標にしない山登りは山登りでないという理屈は通らないと思う。われわれにとっては山登りは飽くまでも趣味である。趣味である以上それは本筋以外のものである。山登りだけに没頭出来るのは、それこそ人夫か案内者だけだろう。それだって1年中やっている訳ではない。無理な山登りじゃおもしろくない。登りたい時に登り、行きたいところに大らかな気持ちで出かけて行く、それがわれわれにとっては本当の山登りのように思えてならぬ。一橋の山岳部員が地味な真面目な山登りをつづけている限り、彼等の中からヒマラヤへ行く人間が一人も出ないからとて、嘆く必要は一つもない。人生には、山登り以外にもやらなければならないことはいくらかもあるからである。

(後略)

編集子の注：『山と高原』(1959年4月号、朋文堂)の「登山史に残る会報3」から転載した。長いので一部を割愛した。吉沢一郎は、東京商科大学一橋山岳部創設者の一人である。

# 針葉樹文庫はわが伝統の証し

上原利夫

平成 20 年 6 月 30 日の針葉樹会総会で、故山本健一郎さんの山岳蔵書約 450 冊の処分を、ご遺族から蛭川さんと竹中さんが頼まれたので、寄贈先を紹介して欲しいと出席者に依頼があった。その 1 週間後ぐらいに蛭川さんから私に協力依頼があった。私の知人鵜飼さんの父君の山岳蔵書が、上高地帝国ホテル読書室に寄贈されており、それを見てきた話をしたのが縁であった。あれこれ考えたが、蔵書の寄贈は難しいだろうと思った。そのとき思いついたのが南アルプス芦安山岳館であった。建物は新しいし、広い開架式の図書コーナーがあり、良い本が並んでいるのを知っていたからである。

昭和 31 年 12 月に、4 年生の山本健一郎チーフ・リーダーを含む私たち一橋大学山岳部の 12 人が、芦安から夜叉神トンネルをくぐって野呂川に下り、池山尾根にとりついた。秋に荷揚げしておいた池山小屋あたりをベースにして、雪の北岳バットレスを登る計画であった。その 20 年前に小谷部先輩らが冬期

初登攀をしていたからである（『針葉樹』第 9 号）。しかし、私たちは天候に恵まれずに敗退した（『針葉樹』第 12 号）。こういう背景があったので、山本さんの蔵書を芦安に遺すのは意味がある。そこで、私が時々お世話になるペンション「チェッカーフラッグ川崎」のご主人に南アルプス芦安山岳館の意向を打診してもらった。驚くべし、塩沢館長は東京商大山岳部の快拳をよくご存知で、蔵書寄贈に大変興味を示されたのである。

平成 20 年 7 月 17 日、推進役の蛭川さんと竹中さんに、倉知さんと私が加わり、4 人で南アルプス芦安山岳館を訪ねて塩沢館長と面談した。その結果、山本蔵書はすべて引き取ってもらえる、文庫は個人名ではなく公の名前にするという 2 点で基本的に合意した。最終的には増山清太郎さんの蔵書も加わって重みが増し、名前も針葉樹文庫になり、思いもよらない良い出来上がりになった。これひとえに関係者のご協力の賜物である。

編集子の注：上原利夫は、一橋山岳部 OB で、卒業年次で山本健一郎の 1 年後輩にあたる。

# 一橋山岳部と針葉樹会の 登山探検記録

倉知 敬・編

北岳バットレス冬季初登攀が日本登山史における一橋山岳部の金字塔であったことは確かであるが、刮目に値するものがそれだけというわけでもない。また、学生時代だけというわけでもなく、多くが卒業後も登山に情熱を燃や

してきた。一橋山岳部出身者の初登などの個々の記録はどこかに発表されてはいるが、まとめて記されたものはこれまで皆無だと思われるので、この機会にその主なものを以下に列記することにより、認識を深めていただく一助にしたい。

注：括弧内の氏名は、一橋山岳部員 / 針葉樹会員以外の同行者

## <積雪期初登>

山名 / ルート名	年月日	氏名	記録記載誌など	備考
岩菅山	1925.3	吉沢一郎 村尾金二 (沢柳、小栗、三富)	吉沢一郎『山へ』 『山と溪谷』297号	積雪期に登頂した登山者の最初の記録。発哨温泉よりスキー使用。 ガイド：関金次郎、関宇太郎
北岳バットレス第3尾根	1935.12.13	小谷部全助 鷹野雄一 小林重吉	『針葉樹』9号	
北岳バットレス第1尾根	1937.1.2	小谷部全助 森川眞三郎	『針葉樹』9号	
北岳バットレス第4尾根	1937.1.5	小谷部全助 森川眞三郎	『針葉樹』9号	
鹿島槍ヶ岳 荒沢奥壁北稜	1937.3.28 ～ 29	小谷部全助 森川眞三郎	『針葉樹』9号	
前穂高岳東壁 (下部北壁経由)	1938.3.17	森川眞三郎 船本文治	『針葉樹』10号	東壁全体の完登。1936.3 慈恵医大・古谷惟七郎らが東壁支稜 (B 沢と CBA フェース左端カンテを縫うルート) を登攀している。
北穂高岳滝谷第4尾根	1939.12.23 ～ 24	大塚 武 山田亮三	『針葉樹会報』 73号 (復刊)	厳冬期初登。 1934.3.26～45 早稲田大学・折井健一らが3分割して積雪期初登している。
前穂高岳北尾根4峰正面壁 松高ルート	1957.3.30 ～ 31	甘利仁朗 (永光俊一)	『岩と雪』1号	紫峰山岳会 (立川高校OB) パーティー
北岳バットレス中央稜	1958.1.7 ～ 8	甘利仁朗 (奥山章、吉尾弘、 芳野満彦、小板橋徹)	『岩と雪』1号	RCC IIパーティー
剣岳チンネ 左稜線 (下部)	1960.3.23	中川滋夫 小林進二	『針葉樹』12号	
爺ヶ岳西俣 奥壁左稜	1960.12.24	中島 寛 小林進二 大建二郎 三井 博 倉知 敬	『針葉樹』13号 『岳人』204号	

## <無雪期初登>

山名/ルート名	年月日	氏名	記録記載誌など	備考
剣岳東大谷 左俣	1929.8.5 ～7	吉沢一郎 (田中信夫、井上 鐘、大久保最司)	吉沢一郎『登高記』	東大谷登攀の最初の記録 ガイド:丸田丈次郎
北岳バットレス 第3尾根	1935.6.21	小谷部全助 鷹野雄一 森川眞三郎	『針葉樹』8号	一橋山岳部の初バットレス行
北岳バットレス 第4尾根	1935.10.30	村尾金二 望月達夫 小林重吉	『針葉樹』9号	核心部マッチ箱稜線ルートで尾根完登。 1934.10 立教大学・湯浅巖らが核心部は 側壁を巻き初登している。
北岳バットレス 第1尾根	1936.9.8	小谷部全助 森川眞三郎	『針葉樹』9号	
北穂高岳滝谷 グレボン	1957.8.29 ～30	中村幸正 中村 保 (芳野満彦)	『岩と雪』2号	

## <海外登山探検>

《ペルー・ボリビア・アンデス遠征1961:隊長・吉沢一郎》

記録記載:『針葉樹』13号、『山岳』57年

山名	年月日	氏名	備考
プカヒルカ北峰 6,050m 初登 (ペルー・ブランカ山群)	1961.6.12	中村 保 中島 寛 中川滋夫	翌 6.13 第2登: 甘利仁朗、丸山則二、倉知 敬
チャウピ・オルコ峰 周辺山域の登攀 (ボリビア・アポロバンバ山群)	1961.7		北部アポロバンバ主要ピーク登頂および周辺未踏峰登攀。 初登はロス・トレス・オンプレス 5,550m (中村、丸山、倉知)、 カカワイチョ 5,450m (吉沢、中島) など
プペヤ山域の踏査・登攀 (ボリ ビア・アポロバンバ山群)	1961.8		未探検地域の踏査。 カニサヤ 5,750m (甘利、丸山、中川)、アカマニ 5,700m (中 村、中島、倉知)、他未踏峰の初登

《東部ヒンズークシュ・ロシュゴル氷河山群遠征1967:隊長・山本健一郎》

記録記載:『ロシュ・ゴル氷河の山旅』、『山岳』63年、The Mountain World 1968/69

山名	年月日	氏名	備考
ノーバイズノン・ゾム 6,600m 初登	1967.8.4	倉知 敬 佐藤之敏	ロシュゴル南方の未踏査山域に入り、この未踏2峰を初登
ウドレン・ゾム南峰 7,050m 初登	1967.8.11	原 博貞 佐藤久尚	
サラグラール南峰 7,307m 初登	1967.8.24	佐藤之敏 原 博貞	未踏査の南面に入り、中央岩稜を経て初登頂

《東チベット山域、雲南・四川の横断山脈など「ヒマラヤの東」の踏査：中村 保》

- ・1990年から2008年にわたる踏査探検により、「ヒマラヤの東」全体の山系の全貌を解明。  
(下記列記は主要な探検行の例)。秩父宮賞、英王立地学協会バスクメダル受賞。
- ・記録記載：中村保『ヒマラヤの東』、『深い浸食の国』、『チベットのアルプス』、『山岳』97年他、Japanese Alpine News Vol. 4 他、T. Nakamura “Die Alpen Tibets”

地域	年月日	氏名
横断山脈四川西部高地山系、党結真拉山塊ほかの踏査	1998.7～8 2000.5～6	中村 保 (永井 剛)
東チベット・ニンチェンタングラ山脈東部：		
イーゴンツァンポー南北の未踏査地域探検	2001.5～6、10～11 2002.4～5、10～11 2004.10	中村 保 春日井実 (永井、河西瑛一郎)
同上、下流、道格氷河地域踏査	2005.10～11	注：春日井は2001.10～11 のみ
同上、ニウチュツァンボ踏査	2006.10～11	
横断山脈三江併流山域：		
イラワジ源流・楽龍雪山ほか山群の踏査	2003.10	中村 保 横山皖一 (永井)
同上、怒江山系・ダムヨン山塊の踏査	2007.11	注：横山は2003のみ
東チベット・カンリガルボ山群踏査	1995.10 1999.5 2006.11	中村 保 (永井)  中村 保 田形祐樹 (永井、河西、新谷忠男、 小野寺斉)

編集子の注：倉知敬は、山本健一郎とともにヒンズークシュ・ロシュゴル氷河山群の遠征に参画した。卒業年次で山本の5年後輩にあたる。

# 山本健一郎さんとの関わりなど

竹中 彰

この文庫開設のきっかけとなった蔵書の所有者山本健一郎さんについては別掲「針葉樹文庫について」で述べたが、小生との個人的な付き合いは、針葉樹会有志の月に1度の集まり、三月会（当初は一木会）のメンバーとして如水会館のラウンジで山行報告や計画などを肴に「しま茜」を酌みかわすことからスタートしている。

我々とは卒業年度で7年の開きがあり、中先輩として仰ぎ見る存在で針葉樹会総会などの場でもお話することは稀だったが、三月会での出会い以降はときに山にご一緒することもあり蓼科の別荘にお邪魔するようになった。

三月会での山道具からワインや本（『フィネガンズ・ウェイク』など）まで蘊蓄を傾けた話や、望月さんなど針葉樹会の大先輩のエピソードなどを興味深く伺うことが楽しみでもあった。

また、個人的には日本山岳会入会に際しての紹介者になって頂き、その後は亡くなる直前までご一緒に監事を務めることにもなり、厳しいながら針葉樹会や日本山岳会の活性化に真剣に取り組まれるお姿を拝見し、刺激を受けることが多かった。

病気の診断が下って無事手術を済まされ、退院直後には日本山岳会関連の親睦組織「メトロ会」の世話人として幹事校の責任を

果たされるとともに、山行復活への意欲を示され、また三月会や日本山岳会理事会にも顔を出されて、周囲の者は復活への期待を膨らませていた。

しかし、2007年2月に再度の入院となり、そのまま帰らぬ人となられた。

しばらくして、山本夫人から蔵書の処分について相談を受け、蛭川さんと色々の方策を考えたが、最終的には上原さんのヒント（南アルプス芦安山岳館に立派な図書室があるのでそこに置いて頂けないか）をもとに、4人で同館の塩沢館長とお会いして当方の考え方をお話し、山岳図書に愛情を持って接しておられる塩沢さんに文庫創設についてご理解を頂くこととなった。

塩沢さんの全面的な支援を受けて、スペース、書架などが整備され、文庫名称にも我々の「針葉樹」を冠して開設することができたことは、山本さんや増山さんの蔵書の多くが無事に納まるべき所に納まった安堵とともに大変な喜びであり、塩沢さんには感謝の言葉しかない。

今後は、針葉樹会員が北岳をはじめとする南アルプスに足を向ける時には是非この文庫を実際に見ること、また今後のフォローアップにも会を挙げて対応していくことが望まれる。

編集子の注：竹中彰は、一橋山岳部OBで、卒業年次で山本健一郎の7年後輩にあたる。

# 山本健一郎さんの ミニヤ・コンカ

蛭川隆夫

山本健一郎さんの蔵書には自らが翻訳した『ミニヤコンカ初登頂』が3冊含まれていました。そのうちの1冊はご遺族が形見として愛蔵され、もう1冊は針葉樹文庫に収められました。この小文は、残りの1冊について語るものです。

表紙は、「ミニヤコンカ」。本文も、中村保さんの「日本語版への序文」も「ミニヤ・コンカ」です。英語は Minya Konka だし、カタカナ語の連語は中点でつなぐという自分のライティング原則に反してもいるので、なぜ表紙だけが違和感を覚えました。出版元の営業上の配慮かと想像しました。

さて、開いてみると、あちこちに朱墨が入れてあります。ざっと100箇所。そのうちのかなりの部分は「校正恐るべし」で山本さん自身が述べている‘left with’の誤訳と伝導団なる誤字ですが（p. 35 参照）、それ以外にもあります。

例えば、「終わり」の「わ」から赤の引き出し線を出し、そこに赤で「?チェック」としてあります。同じように、「空き缶」の「き」に「トル?」の朱書き。正書法が確立していない日本語特有の悩みとはいえ、しきりに送り仮名を思案している様子がうかがえます。なお、一度は「トル?」としながら、後に「トル?」と消し、そこに「ソノママ」と追記した例など、検討を重ねた経過が読み取れるものもあります。

誤訳とはいえない用語選択の朱書きは、い

くつもあります。「これも厳しい仕事だ」の「厳しい」は、引き出し線で「むくわれない」としてあります。「雲が切れるまで」ではなく「雲が晴れるまで」、「そのとき突然」ではなく「そのとき急に」、「米、小麦に次ぐ主要穀物」は「～主要作物」。「説明がされたと聞かされた」は「説明がされたそうである」に直されていますが、これはたしかに後者の方が日本語らしいなと感じました。「二か月」の「か」には単に「?」。この疑問符は何を意味するのでしょうか。二箇月、二ヵ月、二カ月、二ヶ月、二ケ月などの代替案を比較していたのかもしれませんが。

文法的な検討もあります。「湖のすぐそばにキャンプの準備をはじめると」では、「に」を「で」と朱書き。場所を表す助詞「に」「で」の使い分けですが、おそれおおくも、この文例では「に」は誤用です。ここは、日本語教師をしていたときのこと、「喫茶店で待っています」は正用なのに「喫茶店でいます」はなぜ誤用なのかと、生徒から突っ込まれたことを思い出しながら拝見しました。

ここまでは語句レベルのことですが、節、文レベルのものもあります。英語に忠実に訳したと思われる重文で、途中の「～危険にさらし、～」を「～危険にさらしている。～」と短文化。読んでみると、そうする方が自然で読みやすいと思いました。

文字使いもあります。「出来るだけ早く」

を排して「できるだけ早く」、「極めて」を排して「きわめて」、「丁度」を排して「ちょうど」など。特に副詞や接続詞や形式名詞はできるだけ漢字を避けるという自分のライティング原則にも合っているので、いたく共感を覚えました。

このように自分の日本語教育や翻訳（産業翻訳ですが）のつたない経験と重ね合わ

せながら、山本さんの朱墨を拝見したのでした。そして、いつの日かの再販を期しての朱書きだったかどうかは別にして、そうじて、よりの確な訳語、表現を求めての、翻訳者による探求の旅だと受け止めました。同時に、故人は、『ミニヤコンカ初登頂』と、この「横断山脈の最高峰」にひとしお愛着を感じていたのだと思いました。

編集子の注：蛭川隆夫は、一橋山岳部OBで、卒業年次で山本健一郎の7年後輩にあたる。



「マツチ箱」

ぐつと谷間に押し出した  
ピナクル——この寫眞から  
うける印象は、どうしても  
『鬼の牙』といった感じだ  
尖端にかぶつた雪は、いつ  
たい何を咬んだ名残なんだ  
らう。……北岳ハットレス  
「マツチ箱」上部のアブザ  
イレン後の登行

昭和十一年十二月四日

東京商科大学一橋山岳部

望月達夫

大塚 武

日江井正巳

昭和十一年十月廿七日

東京商大一橋山岳部

小谷部全助

小林川真三郎

天幕を徴収して大曾利青木方へ戻す。

☆ 蝮平岩小舎(約十三貫(二人分)の荷物(背負子付)

左記宛 御送り置き下さい。

甲府市柳町三〇 丸茂平造殿

東京市品川区大井元芝町八四九

小谷部全助

案内人 名取治太郎

昭和十二年十二月二四日

東京商科大学一橋山岳部

望月達夫

大塚 武

日江井正巳

昭和十二年十二月二十七日

東京商大一橋山岳部

小谷部全助

森川真三郎

一月二日及三日 釣尾根二八六〇米□□天幕を根拠として北岳パトレス、四尾根を完登し、一月九日総ての天幕を徴収して大曾利青木方へ戻す。

☆ 蝮平岩小舎(約十三貫(二人分)の荷物(背負子付)を置いて来ましたから 此処迄運搬し、更に自動車便にて左記宛 御送り置き下さい。

甲府市柳町三〇 丸茂平造殿

宛名「東京市品川区大井元芝町八四九

小谷部全助

案内人 名取治太郎

## 写真：「マッチ箱」(p. 48)

一橋山岳部の小谷部全助と森川眞三郎は、1937年1月、北岳バットレス第4尾根の積雪期初登に成功した。「マッチ箱」は、その登攀中に小谷部が撮影したもので、登攀記録とともに『針葉樹』第9号(1937年7月)に発表された。

この写真はのちに『氷雪に挑む 山とスキー寫真集』(朝日新聞社、1940年)に転載された。同写真集には、高名なプロの作品とならんで、小谷部の写真が5葉、小谷部の後輩である大塚武の写真が2葉収められている。巻末には、制作データが記録されている。それによると、「マッチ箱」は、撮影月が1月、時刻が正午、カメラとレンズがホクトロール・スコパー 4.5、フィルター理研4号、絞りF5.6、露出1/25となっている。

注：前々ページは、針葉樹文庫所蔵の『氷雪に挑む 山とスキー寫真集』をスキャンして再現した。

## ‘宿帳’(p. 49)

北岳バットレス第4尾根の登攀を終えた小谷部全助と森川眞三郎は、天幕を撤収して芦安村に戻り、‘宿帳’(正確には、『南アルプス登山日記』)に記帳した。『南アルプス登山日記』は、甲斐山岳会芦安支部に残されていたもので、現在は南アルプス芦安山岳館に展示されている。同登山日記には、小谷部、森川以外にも、この地を往来した何人かの一橋山岳部員が記帳している。

注：前ページは、南アルプス芦安山岳館からお借りした『南アルプス登山日記』のコピー原本と書き起こしから再現した。書き起こし文中の不明部分「□□天幕」は、『針葉樹』第9号の記述から判断すると「第二天幕」と読める。

## 編集後記

この冊子は、針葉樹文庫の図書目録を、凡例と索引を附して、利用者に供するものです。同時に、文庫設立の経緯や背景、所蔵図書の構成、文庫としての性格や特色などを多岐にわたって‘解題’した「一橋山岳部の底流にあるもの」(p. 7)を掲載し、利用者の参考としました。

巻末に附録として8編の短文を収めました。冒頭の2編は、文庫所蔵図書の旧蔵者(増山清太郎と山本健一郎)が執筆した、本にまつわる随想です。この二人の蔵書家については「はじめに」(p. 3)で紹介されていますが、随想を通してその人物像に触れていただけるはずで、その他にも、一橋山岳部と針葉樹会に関連する引用記事、文庫の成立経緯を記した随想なども掲載しました。最後に、文庫の縁ともいえる小谷部全助が撮影した北岳バットレス第4尾根の登攀写真と、その小谷部が芦安村の宿で記帳した‘宿帳’(コピー)を附しました。

さて、ここでこの文庫が生まれたきっかけについて補足しておきます。

そもそも、遺族から故山本健一郎の蔵書処分を頼まれたことでした。山本は、晩年、針葉樹会の仲間とたびたび山に出掛けていましたが、それは日ごろ山本が同会の有志を集めて主宰する月例会(初回は2002年2月の「一本会」、のちに「三月会」)を根城に語り合うところから始まっていました。そういう事情から、山本蔵書は、月例会常連の竹中彰・蛭川隆夫・本間浩に引き取られました。竹中と蛭川は、山本蔵書のふさわしい置きどころをいろいろ模索する中で、上原利夫と倉知敬の協力を求めました。こうして、この4人が連携して、本冊子制作に至るまでの文庫設立の諸作業を進めることになりました。

その後も模索が続きましたが、上原の縁で

南アルプ芦安山岳館に山本蔵書を受け入れて頂く運びになりました(『針葉樹文庫はわが伝統の証し』(p. 41)を参照。

山岳館訪問からさかのぼること半年ほどあまり前、故増山清太郎の蔵書の一部が大学構内の一橋山岳部の部室に収容されていましたが、遺族の了解を得てそれを針葉樹文庫に追加することが決まり、ここに文庫の骨格が固まったのでした。

次に、各図書の寄贈者を記録に留めておきます。

貴重な『針葉樹』全巻揃い(分類番号1-01～14)を初めとして、目録の分類I「一橋山岳部と針葉樹会の公式資料」のほとんどは、増山が寄贈しました(他に、1-16～17, 23～26, 28, 31)。増山の寄贈書は、分類IIでは2-34, 38, 43～45, 54, 56～57, 61, 66～67、分類IIIでは3-007, 114, 144, 221, 228, 235、分類IVでは4-002, 004, 007～008, 013, 019, 024, 027～028, 030, 033, 036～040, 042, 049～050, 054, 056～057, 063, 065, 068～069, 071, 079, 090～091, 095, 111～112, 114～115, 118, 121～122, 124となります。

分類番号2-23, 27～28, 59, 62は倉知が、同1-15は蛭川が、さらに同1-18～22は針葉樹会が、それぞれ寄贈しました。

以上で目録の89項目を占めます。残余334項目は、『マウンテン・ワールド』全巻揃い、分類V全集の全冊を含めて、すべて山本が寄贈しました。

この冊子の作成にあたり、(株)遊歩クリエイト・ジャパンの山崎孝寿氏と(株)ミックの大友勝弘氏にご協力を賜りました。最後になりましたが、両氏に厚く御礼を申し上げます。

(2009年5月16日、蛭川隆夫・記)